会報 特攻

平成9年11月

第33号

〒105 東京都港区虎ノ門
3—6—8 第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090

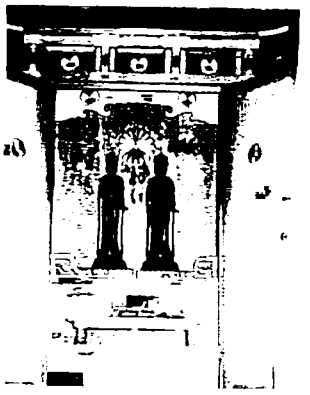
編集人 田中賢一
発行人 木村元正

第46回 特攻平和観音 年次法要

この行事は世田谷山観音寺が施主となり、特攻観音奉賛会の後援のもとに毎年9月23日に行われている。奉賛会と我が協会とは、同一のものである。

梵鐘点打三回で始るこの行事は、山主願文、会長祭文、追悼の辞と例年通り進められた。追悼の辞の遺族代表は義列空挺隊酒井敏夫（3独飛、特操1期）の甥酒井弘義殿、戦友代表は震洋会の豊廣稔氏が奏上した。

献吟も例年通り石橋一歌氏が特攻隊員の遺詠を奉納し、そのあと海軍重装会ラッパ隊の儀仗参拝があった。これも例年通りである。



つのる懐い

余韻嫋嫋　梵鐘に
懐いはつのる身を捨て、
嵐に向ひし　いくさ神
気高き姿　かんぜおん

知覧の里に夜は更けて
明日出撃の　命くだり
言ひ残すこと既になく
眺むる月の　涼しさよ

月影淡わき　故郷の
如何におわすか父母は
我が志　うべないて
齢　長きを　唯祈る

人生　僅か　五十年
その半にも満たねども
見果てぬ夢に変りなく
今こそ散らんさくら花

天翔りゆくをのここそ
我が定めたる道なれば
仇なす艦をひつさげて
闇魔の庁に　土産せむ

同期の桜の　歌をはり
三角兵舎の灯も消えて
戦友の寝息は安らかに
現世に果つる我が夢路

目次

特攻観音年次法要……1
第22回戦没者慰霊大祭……2
真の宗教人……3
マリアナB29基地に対する攻撃⑥……4
〔特攻人物伝①〕奥山道郎大尉……15
学徒動員の思出……19
怨親平等の観音様……22
特攻隊絵葉書発行に因んで……23
反日歴史教科書の是正について……25

第22回戦没者慰霊大祭

靖國神社　8月15日　英霊にこたえる会

拝殿を埋め尽す七〇〇人近い参列者を得て行はれた。堀江正夫会長の捧げた祭文の要点は、

先帝陛下は「大東亜戦争終戦ノ詔書」で〝戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク〟と宣わせ給い、同じく「終戦ニ際シ陸海軍人ニ賜ハリタル勅語」にあっても〝朕カ親愛ナル陸海軍人ハ瘴癘不毛ノ野ニ或ハ炎熱狂濤ノ海ニ身命ヲ擲シテ勇戦奮闘セリ朕深ク之ヲ嘉ス〟〝鋒鏑ニ斃レ疫癘ニ死シタル幾多忠勇ナル将兵ニ対シテハ衷心ヨリ之ヲ悼ム」と共ニ汝等軍人ノ誠忠遺烈ハ萬古国民ノ精髄タルヲ信ス〟と御嘉賞になっておられます。

しかし、この殉国の英霊に報いるべき今日の祖国日本の国家と同胞は、果してこれにお応えいたしているでしょうか。―

歴代総理は他国の戦没者慰霊施設に表敬参拝しても、自国の靖国神社への公式参拝は、いわれなき中国の恫喝に屈し絶えて久しく、国家基本の道義までも省みない愚行を続けております。司法もまたさきの最高裁の愛媛玉串料訴訟判決に見るように、英霊の崇高な殉国の精神も、我が国の伝統・文化・習俗に配慮した柔軟な法の運用も踏み躙った国民の到底納得できない、戦没英霊に対する背信の不当判決を行いました。―

私共はこれら国の実態を直視しその非を訴え続けながら御霊の尊い殉国の御心と、正しい史観を次代に継承いたすべく、さらなる努力を致すことを心からお誓い申上げ、ここに本年もまた先帝陛下が昭和六十一年八月十五日にお詠みになられた御製を奉唱して祭文といたします。

この年のこの日にもまた靖国のみ社のことにうれいはふかし

橋本首相本年も参拝せず

昨年は日をずらし本人の誕生日とかに参拝したが、すぐに中国から叱られた。今度は叱られる以前に参拝しないと宣言している。いつから中国の属国になったのか。

四周の異民族を東夷西戎南蛮北狄と称し見下げるのは、世界的大帝国漢王朝以来の彼等の中華思想である。そこへもってきて、ちょっと脅せばすぐに従うとあっては、増長慢はつのるばかり。その様をみて韓国や北鮮もそれを見習う。無理もない、歴史を見れば半島の国はかつては朝貢国だったから。

橋本首相は終戦のとき小学校二年だった。米国の巧妙かつ徹底した占領政策と、それに乗っかった日教組によって、東京裁判史観に染めぬかれた時代の教育を受けた階層である。身近な戦友を御祭神にもつ我々年代とは、英霊に対する感覚が違うのはやむを得ないかも知れぬ。それにしても、かつて二年余り従兄弟が戦死した故をもって、日本遺族会の会長をしていたことがある。それを思うとまことに釋然としないものがある。これが現代の政治家の常態かも知れない。

戦後の年代の違いとは恐ろしいもので、祭文にも出ている愛媛玉串料訴訟の最高裁判決で、合憲をとなえた二人の判事は七十才、違憲と判定した十三人は皆それより若く、平均年齢は六十六才という。勿論戦後の歪められた学校教育を受けた者でも、立派な人は沢山いるが、あのような反日教科書が罷り通る世の中になったことは、祖国のこれからが思いやられる。

特攻の英霊は如何にみそなわせ給うか、こんな国になるなら一命を棄てるではなかった、と仰っしゃるかも知れぬ。我々の持時間は残り少ない。上記祭文の末尾こそ我々の志である。

首相は参拝しなくても庶民は小雨をついて続々と詣でている。

真の宗教人

前々号の愛媛玉串料訴訟の記事で、このような訴訟を起す宗教人を「外道」と罵しった。辞書をみると外道とは、異端邪説、人を邪道におとし入れるもの、悪魔、という意味が出ている

ところが、ここに真の宗教人の存在を、声を大にして紹介したい。

千葉県茂原市吉田にあるマリアの里カトリック日曜学校では、英霊にこたえる会が毎年8月15日に靖国神社で行う慰霊大祭に、園児達が作った千羽鶴を奉納し、本年で13回に及んでいる。毎回手紙が添えられており、いつも拝殿に飾り手紙も披露されているが、本年の文面は特に参集者の胸うつものがあったので、全文を紹介する。

折りづるによせて

五月半ば頃、深川扇橋の知人を訪れた時のこと、読んでごらんと言われ、何気なく一冊のパンフレットに目を通しました。「日本人よ大和魂はどこへいった」台湾の方から我々に向けられたこの一言に、一瞬奇妙な感じさえ受けました。

我々日本人の間でさえ忘れ去られようとしてた言葉を、外国の方に指摘されたからなのでしょうか。

日本の将来を負って立つ青少年の犯罪が急増する昨今、今年も靖国神社の英霊に感謝の祈りをこめて、千羽鶴を折りました。特に今年は、特攻隊として自らの青春も生命も捧げ、南の海に散って行かれた少年達のことを、考えずにおられない気持でいっぱいです。靖国に眠る少年達に、改めて感謝の心と、偉大な魂の持主であったことへの贖罪の念をこめて、一羽いちわ折りました。

現代の教育の中で、事件が起きる度に「子供達に生命の大切さを教えて行きます」と報じる教育者達。マニュアル化したこの言葉を耳にするとき、何か白けたものを感じてしまいます。

日本の歴史の中で同じくらいの年齢を生きてきた先輩達が、祖国を愛し己を無にして国を守る為に、尊い命を捧げて行かれたことを、又少年であるが故に純粋な愛国心をもつて戦場におもむいて行ったことを、誰はばかることなく今の少年達に話して行くことこそ、生命の大切さの原点ではないでしょうか？

あのA少年の書いた卑劣な文章と、死におもむく前に書き残した遺書とも言える、あの特攻隊の少年達の手紙を比べ、その余りにもかけ離れてしまった心を教えて行くべきだと思います。ただ単に日の丸をかかげ君が代を歌うだけではなく、国際社会の中で生きて行く青少年に、日本人としての特色ある大和魂を育くんで行くことこそ、大切なことと思います。

犯罪をおかした少年が少年法で守られるならば、靖国に眠る少年達英霊に日本国民として「ありがとう」の一言そして慰霊の心をもつことこそ、大和魂を持った日本人ではないでしょうか

平成九年八月　終戦記念によせて

マリアの里日曜学校

代表　塩崎深雪

反日反民族教科書の編集者と、それを認可した文部大臣よ、この宗教人の爪の垢でも煎じて飲んだらどうだ。

ほかにも真の宗教人はいる。この日参道で道行く人に小冊子を配っているキリスト教徒がいた。「生命之光」と題したその小冊子の中の一文にいう。

……その時私は二十五歳だった。特攻平和会館で、若い隊員達の遺書や写真に出合った。註知覧のことだろう

大君の為何か惜しまん若桜

散ってかひある命なりせば

使命に生きる誇、母国への切々たる思をこめた絶筆や和歌、気がつくと、隊員たちの清々しい笑顔があちこちで燦めいている。未来ある青少年達が、何の不平もなく、さらりと機上の人となって、祖国を守る為に征かれたのだ。

自分だけの幸福を思ったことが恥かしかった。多くの犠牲の上に私の「生」はある。目に見えない方たちの祈り、励まし、願いが私にもかけられている。熱い涙がとめどなく流れた。……

マリアナB―29の基地に対する陸海軍の経空攻撃 ⑥

未発に終った特攻空挺作戦　其の二

海軍の剣作戦

先ず戦史叢書「聯合艦隊⑦より関係個所を抜粋する。

軍令部総長の奏上　豊田軍令部総長は六月三〇日、計画準備中の各種特殊作戦に関し、次の奏上を行った。

一　海軍総隊ニ於テ目下計画中ノ特殊作戦ハ次ノ通リ

(イ)「マリアナ」基地攻撃作戦

剣作戦　予テヨリ潜水艦ヲ以テスル上陸作戦ニ備ヘテ準備セシ特別陸戦隊約二五〇名ヲ中型攻撃機約二五機ニ依リ「マリアナ」B―二九基地ニ強行着陸ヲ敢行シB―二九ヲ基地ニ於テ破摧セントスル挺身攻撃作戦ニシテ目下七月中旬以降月明期ノ夜間実施ノコトニ計画中ナリ

烈作戦　銀河胴体下方ニ多数ノ機銃ヲ装備シ　硫黄島及「マリアナ」ノB―二九基地ヲ強襲スル作戦ナルモ目下機材準備等ノ関係ニテ使用機数時機等未定ナリ

(ロ)潜水艦ニ依ル特殊作戦

（編者が省略）

剣、烈作戦　小澤海軍総司令長官は六月二十四日、寺岡第三航空艦隊司令長官に対し「剣作戦部隊（指揮官　呉鎮一〇一特陸司令トス）ヲ編成シ　主トシテ敵B―二九戦力破摧ヲ目的トスル『マリアナ』方面基地ニ対スル挺身攻撃ヲ準備」させるよう命じた（GB電令作第九三号）。

小澤長官の指示した剣作戦部隊の編成兵力は、横須賀鎮守府部隊所属の呉鎮第一〇一特別陸戦隊（司令　山岡大二少佐）と空挺飛行機隊二〇機（準備機、三、五、一〇航艦から派出の一式陸攻二五機〈搭乗員二〇組〉）であった。海軍総隊では、剣作戦部隊の作戦準備基地を三沢基地と定め、また飛行機隊の作戦実施兵力を戦力の状況によっては二五機に増勢したい意向であり、六月二十七日、その旨の電令を発するところがあった（GB電令第九六号）。

その後剣作戦部隊には陸軍空挺部隊が加えられることになり、このため豊田軍令部総長は七月二十七日、小澤長官に対し「航空総軍司令官隷下第一挺進団ノ一部（約三〇〇名）ヲ指揮」すべき旨の指示を発出した（大海指第五二七号）。小澤長官は同日、陸軍兵力と第五航空艦隊、第百一航空戦隊から派出の一式陸攻計三〇機とで第二剣作戦部隊を編成すべく、寺岡長官に所要の命令を発した（GB電令作第一三五号）。第二剣作戦部隊の編成に伴い、従前の剣作戦部隊は「第一剣作戦部隊」と呼称されることになった。園田直大尉の率いる陸軍空挺部隊は八月六日、千歳基地に進出して寺岡長官の指揮下に入った。

一方烈作戦部隊は編成後（編成時不詳）、松島基地にあって訓練整備に従事した。兵力は銀河三〇機（指揮官　野口克己大尉）、うち十五機は多銃装備（各機二〇粍機銃一七丁を下方各方面に向け装備）、他の一五機は爆装（各機二〇一号爆弾一二個―各個は三六個の子爆弾を装入）であった。各装備五機あて組み合わせて一〇機編成三組とした。烈作戦部隊の基地制圧下に、剣作戦部隊を挺身着陸させるという構想である。

多銃装備機の実験は七月十四、十六の両日、航空本部によって実施された。機銃の調整及び装備に若干の欠陥が認められた。この実験で、B―29の掃射には高度二〇〇米が適当であることがわかった。また爆装機の爆弾投下実験が二回にわたり実施されたが、第一回では九発中六発、第二回では六発中二発がそれぞれ不発という成績のため、「現状デハ使用不可」と結論され、七月二十五日対策打合会が設けられ、対策が講ぜられた。

海軍総隊では、七月下旬に作戦を実施する予定で準備を進めた。ところが七月十四日、三沢基地は米機動部隊の空襲を受け、同基地にあった剣作戦部隊の陸攻が潰滅的打撃を受けてしまった。しかし、当日海軍部に届いた電報では、現地飛行機の被害は一〇機程度であったので、豊田軍令部総長は翌十五日、戦況奏上の際、本件に言及し「我航空基地ノ損害ハ極メテ軽微ノ模様ニシテ飛行機十機内外炎上セル程度ナリ」と言上した。

その後、その被害が剣作戦部隊のもので、しかもその大半が炎上したことが海軍部に判明、豊田軍令部総長は二十五日、剣作戦の延期のやむなきに至ったことを、次のように奏上しなければならなかった。

剣作戦ハ今次月明期ニ実施ノ予定ナリシ処七月十四日ノ敵機動部隊ノ三沢

方面空襲ニ依リ陸攻一八機ノ被害アリ
百方手段ヲ尽セシモ天候不良及其ノ後敵機動部隊ノ策動等ニ依リ機材ノ準備間ニ合ハザリシヲ以テ　準備訓練ヲ完全ニシ本作戦ノ必成ヲ期スル為　次機月明期間八月十八日以降ニ延期ノ已ムナキに至レリ

八月に実施予定の剣作戦には第二剣作戦部隊も参加することになった。剣作戦部隊の攻撃基地に対する指向兵力は次のようなものであった。

第一剣作戦部隊　グァム　二〇機
　　テニヤン　一〇機
第二剣作戦部隊　サイパン　二〇機
　　テニヤン　一〇機

八月五日、小澤長官、大西軍令部次長、高松宮大佐らの烈作戦部隊の視察が行なわれた。また六日には第一剣作戦部隊の総合教練が実施され、寺岡中将の日誌によると「良好な結果を収めた」。第三航空艦隊では剣、烈作戦部隊をもって神風特別攻撃隊第六御盾隊を編成し、八月十九日から同二十三日の間の月明期に作戦を決行すべく万端の準備中に終戦を迎えた。

――――――――――――――――

剣部隊指揮官である呉剣第一〇一陸戦隊司令山岡大二少佐（故人）が中心となって昭和53年に発刊した「特攻S特」と題する部隊史があるので、その要点を抜粋紹介する。

一、発　端

昭和二十年五月末頃、司令は海軍総隊司令部に呼ばれた。単身で館山駅発の一番列車に乗る。その頃枇杷の盛りが漸く過ぎた南房は日中は既に汗ばむ程で、初夏の気が山野に満ちていた。電話で、司令部所在地の道順を聞いていたので千葉、両国、秋葉原、渋谷と乗換え、東横線の日吉駅に降り立った。迎便が見つからない。早速得意の速歩にうつる。坂を登って暫時行くと、慶応大学予科の学校施設を徴用して、本部に当てている、海軍総隊司令部に入った。霞ヶ関にある赤煉瓦の軍令部の部員室が狭く雑然としていたのに比較すると幾分広くゆったりした幕僚室である。参謀副長はじめ二三の方にあいさつし、主務参謀の話を聞く。（あとで、この人は山岡三子夫大佐だと聞いた。）ここで一寸当時の戦況に触れて置こう。外では四月七日に第二艦隊（戦艦大和他）の沖縄特攻があり、五月下旬には沖縄守備軍は戦力喪失（陥落は六月二十三日）。五月二十四日陸軍の義烈空挺隊が沖縄本島の米軍飛行場に八機で夜間強行着陸を敢行した。内では東京は三度の空襲で大半が焼土と化していたし、〝誠忠鬼神をも泣かしめる各種特攻も頽勢を挽回させるに至らず〟。B29の戦略爆弾の威力（主として焼夷弾）は、急速に国内の諸生産力を低下させ、海外からの補給の不如意と相俟って、国運は将に重大な様相を呈しつつあった。

主務参謀は海図を指しながら説明される。

『敵B29の跳梁には本当に手を焼いている。当面これに対する有効な対応策が無い。よって、君の部隊を一式陸攻に乗せてマリアナ方面の航空基地に強制着陸を敢行させる。陸戦隊員が主となり、地上でB29を撃破する。この作戦が成功すれば、敵が体勢を立て直すまでに一～二カ月かかるだろう。それによって敵の本格的日本本土進攻開始以前に、可及的に国内生産を挙げ、本土防衛体勢の整備を図る。いわゆる時を稼ぎたい訳だ。サイパンまで約一三〇〇浬。一式陸攻で約十時間を要する渡洋攻撃である。戦闘機の護衛はつけられない。夜間飛行で行く他手がない。本作戦を成功に導くためこれに協力する他の作戦を検討する。貴官の率直な所見を聞きたい。』と。

正直なところ一瞬ぎくりとする飛行機でか？　それもその筈。その時まで、第四章で記述した通りわが部隊は、潜水艦によって、米本土に実兵攻撃をかけるということを十九年暮以来、極秘裡にではあるが唯一の目標として、これ一筋に訓練し研究して来た。突如として空挺作戦をやれと云われて、ぐっとつまった。一体現在の我が術力と敵の制空権下において、航空機がマリアナ群島までとっつける公算があるのか……。既に硫黄島は敵手に渡ってから時が経ち戦闘機隊が進出しているとの情報を知っていた。

指揮官は、所轄長たる司令は真勇をもって正当な判断を下さねばならぬ。出来ないことは出来ぬ、と言わねばならぬ……。

しかし、然しだ。自問自答は続く。今日の帝国海軍の置かれた立場を考えよ。この超非常時に、成算だなんて言って居られるのか。大日本帝国存亡の危機だ日本民族が生きるか死ぬかの境じゃないか。国破れて何の陸戦隊ぞ、何の海軍ぞ。

B29は不具戴天の敵だ。この章のはじめに述べた様な境遇に立っていた司令も敵愾心を燃やしている矢先である。我が部隊にとっては編成以来約一ヵ年半、血と汗の訓練で得たその実力を発揮し、君恩に報いる千載一遇の機会ではなかろうか。この国運重大なときに、これ丈の期待をかけられてお召しが来るとは全くの栄誉というべきである……。

その間、時間は極く短いが、胸中には複雑な感情が去来した。ややあって、その場で、次のような返答をした。『飛行場に着陸してからの戦闘には充分その任に応じ得る実力と練度を持って居ります。一般的な爆破法等も演練しているので、島にとっつきさえすれば、存分に暴れ廻って、目にもの見せてやる自信があります。なお、詳細に亘っては部隊に帰って検討したいので一日の猶予を願いたい。』と。

日が長い季節だからまだ明るいうちに、部隊に帰りつく。恰もその日から内房の富浦海岸で海上訓練をはじめたところであったので、仮の宿舎である富浦館の一室に極く少数の幹部を集めて、内密に、この作戦の実施の可能性について縦横の検討をおこなう。集まった幹部誰も先ず、飛行機隊のサイパン到達に懸念が表明されたが、それ以外については、すべて司令と概ね同意見で、飛行機がうまくサイパンに着いて、我々を地上降ろしてさえすれば、存分の働きをしてみせましょうとむしろ司令を励ます位。中一日は充分研究したうえ地上にあるB29撃破戦法と使用兵器資材について腹案を一杯持って、再度日吉の総隊司令部に出頭して、報告した。今度は時間を掛けて打合せを済ませ、幕僚宿舎に一泊した。

二、電令！月明下サイパンに強行着陸せよ。

それから約二旬を経過し、一寸拍子抜けがした六月二十三日私は連絡を受け、木更津にある第三航空艦隊司令部に出頭した。折から司令部は郊外の丘の谷間に疎開しつつあるところで何となくごたごたしていた。司令長官寺岡謹平中将に伺候あいさつし、あと幕僚室で打合せを行った。先任参謀佐々木大佐、作戦参謀角田中佐の他に見るから不敵の面魂しいの大男。紹介されて厳谷二三男少佐だとしった。神戸高等商船卒で正規の将校となった六十一期相当の人。海軍航空隊で陸攻生え抜きの歴戦のベテランパイロットである。又、砲術学校教官竹添善雄少佐が、この打合せに特別参加して陸戦に関する貴重な助言を添えてくれた。この時、B―29地上撃破用吸着爆雷の試作品の紹介があり、当方から若干の改善意見を出した。この厳谷少佐と私とはそれから終戦まで、そして更に、二十年9月初旬、司令が松島基地を去る日までずっと一緒で、三沢基地に居る間は同室でベッドを並べて、この未曽有の大空挺作戦「剣作戦」の実施の為に、共に心胆を砕きあう中となった訳である。

角田中佐は第一段作戦で、海軍の落下傘部隊の作戦に参画したことのある空挺作戦の権威で、同乗飛行者の注意事項等細かいところに気を配った意見を述べられた。訓練基地への進出時機等の打合せが終わると夕刻から「佐久間」で懇談。このとき、厳谷少佐は『二〇機なんてケチケチせずに一〇〇機を充当せよ』と盛んにいきまいて居られた。（後日この意見が採用されて六〇機となった）。館山に帰って至急進出準備にかかる。六月二十四日夜、緊急親展の軍機電報を受取った。GB電令作第九三号（戦史室資料による）

一、横須賀鎮守府司令官ハ呉鎮一〇一特陸ヲシテ第三航空艦隊司令長官ノ指揮ヲ受ケシムベシ。

二、左ノ派出区分ニ依ル空挺飛行機隊（一式陸攻二〇機）ヲ編成、第三航空艦隊司令長官ノ作戦指揮ニ入ル。第三航空艦隊一飛行機隊（指揮官および搭乗員一〇組機材一〇）第五航空艦隊（搭乗員一〇組機材五）第一〇航空艦隊（機材五）

三、第三航空艦隊司令長官ハ前二項兵力ヲ持ッテ剣作戦部隊（指揮官ヲ呉鎮第一〇一特陸司令トス）ヲ編成シ主トシテ敵B29戦力破摧ヲ目的トスルマリアナ方面基地ニ対スル挺身攻撃ヲ準備セシムベシ

四、本作戦を剣作戦ト呼称ス作戦時機ヲ七月ニ於ケル月明期ト予定ス

五、横須賀鎮守府司令長官ハ右作戦準備ニ関シ横須賀海軍砲術学校及指揮下各航空隊並ニ軍需部ヲシテ密ニ協力セシムベシ。（あとで追加訂正電報が入り機数を二五機訓練基地を三沢航空基地に指定さる。）

すなわち、剣作戦は海軍総隊（以下BGとす）直々の計画で、作戦実施の責任は第三航空艦隊（以下3ＡＦとす）である。またその準備を担当して細かい世話をするのが松島航空基地に在る七〇四空（後七〇六空となる）で横鎮が作戦準備ロジ支援を担当した訳である。

わが呉一〇一特陸をこれに充当するに至ったのは、敵の対潜哨戒能力が強力になったため潜水艦で陸戦隊を運んで要地攻撃をすることは実施困難となったことが主因であろう。この辺の消息は、次の二〇年六月三〇日一五三〇軍令部総長から戦況を陛下に奏上された文の中に簡潔に表現されている。

六、海軍総隊ニ於テ目下計画中ノ特殊作戦ハ次ノ通ナリ。

(イ) マリアナ基地攻撃作戦

剣作戦　予テヨリ潜水艦ヲ以テスル上陸作戦ニ備ヘテ準備セシ特別陸戦隊約二五〇名ヲ中型攻撃機約二五機ニ依リ

「マリアナ」B29基地ニ強行着陸ヲ敢行シB29ヲ基地ニ於テ破摧セントスル挺身攻撃ニシテ目下七月中旬以降月明期ノ夜間実施ノコトニ計画中ナリ

烈作戦　銀河胴体下方ニ多数ノ機銃ヲ装備シ（註25粍機銃20挺）硫黄島及「マリアナ」ノB29基地ヲ強襲スル作戦ナルモ目下機材準備等ノ関係ニテ使用機数時機等未定ナリ

(ロ)　潜水艦ニ依ル特殊作戦（嵐作戦、光作戦のことが書いてある。）

ここに烈作戦の名が挙って居るが、その後ゆくゆく作戦実施要領を煮詰めてみると、剣烈作戦は同一時機に実施（烈が急襲し、その直後に剣が降りる）ことに、練り上がったのである。烈作戦は丹作戦の流れを汲むものと見てよかろう。野口克己大尉（予科練出身）が指揮官。

いよいよ、正式に命令を受けて、正に武者振いがした。わが部隊も愈々最後だと思うとせめても、一目親兄弟に会わしてやりたいと思い、総員に両三日の墓参休暇を与えた。内心で、心配していた空襲による列車交通の障害もなく、全員無事定刻五分前に帰隊した。しかし、極度の秘密を要する作戦であるので真相は殆ど誰にも知らさずに、ただ『訓練基地を三沢に移す』ということだけを告げて、部隊の荷物を軍用列車に満載して、館山を立った。そうとはいうものの、戦時中で、いつ出撃命令がくるかわからない挺身部隊（出撃すれば生還期せざる必死隊）ではあったが、一年以上館山およびその附近に駐留し訓練していたのだから、断ち難い人間的絆はあるいは強いものもあったであろう。別離の情亦切実なものがあったであろう。とにかく、機密保持には細心の注意を払ったが市中には山岡部隊米本土攻撃に出撃する風聞が立ったようだ。

司令は副官阿部予中尉と先任中隊長山内中尉を帯同一足先に館山を後にし、先ず、横須賀鎮守府に出頭、長官戸塚中将にお別れのあいさつをしに参上した。飛行機屋である長官はこの時「史上空前の大空挺作戦である。確りやってくれ。君の写真を送ってくれ」と言はれたことが、その特徴のあるお顔と共に印象に残っている。その後木更津に廻り3AF司令部で長官にあいさつの後、幕僚と打合せ。この時3AF作戦参謀は62期の三沢裕少佐に変わっていて、兵学校以来の顔なじみ故遠慮の無いところ。なお、この打合せには艦本の化学兵器係部員と竹添少佐が来て、先日示したB29地上破壊の吸着爆薬の試作品の改善説明があった。これなら良かろうと時限導火線及び発火装置とともに至急製作を依頼した。この日で、中央における打合せは全部終了し、宮城を遙拝しつつ、はじめて一式陸攻の機上の人となる。操縦は厳谷少佐と川口大尉で最高級。指揮官席に軍刀を股に挟んで座ると、乗り心地は上等である。行き先は松島を経て三沢。

ところが、霧のため塩屋崎附近で引返し、翌日、松島に辿りつく。ここで七〇六空司令安川大佐にあいさつ、諸打合せあり、副長以下の諸幹部と初顔合わせ。航空関係の人達とは顔なじみが薄い中に、六十六期の伊藤大尉は海兵の三期下だから、かすかに記憶のある顔。また、銀河隊の隊長野口中尉の勇猛な姿に初めて接した。

翌日も霧中だったが、三沢上空でうまく切れ目を見つけて降下、流石はベテラン。首尾よく三沢航空基地に第一歩を印した。時に六月三〇日。飛行場から青森県特有の悪路を車で揺られて約二〇分、同一基地でも遙か離れた木造バラック群で成立つ乙基地に着く。ここでどう準備訓練を実施しようかと、あれこれ考えながら、霧深い松林の端にたたづむ。部隊はまだ到着して居ない。

三、三沢基地に進出、準備と訓練

七月にはいると、わが特陸部隊員やその諸装備が続々と到着。飛行機隊関係者も順次集結して、地上整備員の人達を含めると五、六百名にもなったろう。皆斉しく歴戦の勇士で、救命袴に「神雷」と書いた者もあり、頼母しい若人ばかりと見受けた。陸戦隊員の中には緒戦にセレベスのメナドやチモールのクーパンに降下作戦をした海軍落下傘部隊から来た者も若干居たが、多くは飛行機には初めての者だったから、航空隊員とはお互いに知っている顔が殆んど無い。それぞれ専門の違う者達である。

ところが、だんだんに作戦の内容が解ってきて、その「特攻必死」という強烈な作戦の性格、指揮官以下総員が同一目標に突っ込むという盟友意識が芽生えてくると、はじめは何となく馴染まなかった「陸」と「空」も（空同志の間も）急速に親しみを増し、搭乗組割が決まったその日から、一機分づつ、同一部屋に居住区をまとめ、部屋の入口には機の先任者の名前をとって「〇〇一家」と掲げるありさま。作戦部隊員の目の輝き、顔の色、態度動作が時々刻々といえるくらいに変化して、団結は堅く士気は高揚の一途を辿るかに見受ける。厳谷少佐（肩書は七〇六空飛行長）と私は本部入口の当直室から一番目の部屋に陣取る。厳谷少

佐は指導官と呼称することにし、指揮官と指導官で万事を、広汎な作戦、人事、機材万般に亘る事項を処理してゆく仕組とする。厳谷少佐は、その著書「中攻」を読んでも明らかなように、戦歴からいっても、ベテラン中のベテラン。頭あり、腕あり、腹ありという立派な人である。私は航空関係は一切を指導官にお願いし、おまかせして只管『指揮官道』に精進することに心掛ける。作戦準備は着々と推進される。航空関係の準備は機材の集結、改造、整備である。特陸司令が作戦部隊指揮官という名は戴いても、航空関係にはそれでも素人だから、細かいことはわからない。

エンジンの整備の大変なこと（平野（整）大尉の精根を尽くした姿にしばしば心を打たれる）、強行着陸直後陸戦隊員が急速脱出可能のように、尾部のスポンソンを換脱可能とすること、可及的に機体重量を減ずるため不急物件を取外すこと。（電探は各中隊機長機だけ残す、機載機銃も全部卸す）等が主なものである。G・Bの電令（作）に基いて編入されてくる搭乗員並びに機材の集結とても、当時の状況では、大変なことである。搭乗員の殆どが、剣作戦のことに関しては何も知らされずに集まってきたもののようである。その心中たるや深刻なものもあったであろう。ここが一番の問題点だと解っていても、指揮官としてはどうしようも無い訳で、ただただ、海軍々人の、そうして日本人の血を信ずるのみである。確り頼む。俺について来い。

陸戦関係で一番苦心したのは地上における行動力の増強である。広大なB29飛行場の滑走路に無事着陸し得てから、攻撃目標である分散待機中のB29に近迫して、一機また一機とつぎつぎに爆破してゆくには「足」を早くすることが絶対必要である。自転車にしようかと考えてあの国内物資欠乏の時機にできるだけこれ等を集めてもらう。その頃としては相当の（そうして現在から考えれば誠に情無い）台数が集まる。いろいろとテストしてみて、結論的には自転車を各機三台～五台搭載ということにする。九九式重機の牽引運搬用の車も作ってもらう。行動力発揮の為、オートバイが考えられ、集まって来たのは数台で、重すぎ大きすぎて使用に適しないことがわかり、オートバイ使用は断念した。個人装備として総員が一四式拳銃と一〇〇式機関短銃を持つ。爆破の主兵器である蛸の吸盤を付けた約十五糎角厚さ約六糎の爆薬も完成した数量だけ逐次送り届けて来る。時限発火装置は長（約2分）、短（約三〇秒）の二種類である。

服装としては爆薬の携帯に便利な、ポケットの沢山ある「チョッキ」を新しく、特別に作製。これは、池内主計長が米航空士のチョッキの戦利品からヒントを得たものであった。また携行糧食の選択と集荷には品川の経理学校研究班に随分御世話になる。海軍経理学校出（二十六期）の窪田良雄主計大尉に熱心に研究してもらった。少量で栄養と満腹感を得る力餅のようなもの、その他数種を併せて二日分の用意。これ等も当時としては随分有難い貴重品である。夜間視力増強用として作戦決行当夜眼に点眼する暗視ホルモン剤を入手していた。応急の焼討用にライターの集荷を依頼したが海軍の力をもってしても全然無いとのこと。包括的に見て搭乗員には陸戦服装、装備の初歩から準備しなければならない訳であるから、決行時機が目睫に迫っている状況では何とも大変な仕事である。

訓練

霧、霧、霧、二十年は特に霧の多い三沢の夏であった。日中から霧の日もあるが夕方からは殆んど毎夜のように濃い霧が、あたり一面に這いよる。夜間の陸戦を終わって宿舎に帰る頃は、雨にずぶぬれになったと同じで、ぶるぶる震えながら風呂に飛込んで、やっと生気を取り戻すというのが毎日の日課。翌日、半乾きの服を着ける時の気持ちの悪さ。若い隊員は付随的苦労も多かろう。見たところ、誰も一向苦にする様子も無くケロリとしているが……。その代り朝は極くゆっくりの日課である。

先ずB29の地上撃破訓練であるが、B29が地上に在るときは飛行から帰投後直ちに燃料満載の状態にあるので主翼のタンクにはガソリンが一杯である。この翼の下面に吸着爆弾を吸い着かせて爆破すると大爆発が起り一挙に撃破できる。又、想像に反して、B29には掩体壕は無いので、次から次へと直線的に進撃可能ということが判っていた。

内地上空での撃墜機から入手したB29整備教本の複写本を配付されたので、それを基にB29と同型同大の木造模型を松林の空地に航空廠が作ってくれる。その頃三沢基地に在る横空に『連山』が一機か二機あったがそれよりは一回りも大きいB29の図体である。このB29の模型に対し、夜となく、昼となく、入れ替り立ち替り、攻撃訓練を行なう。陸戦隊員は一機に十名乗るので、これを五名ずつの攻撃班

とし、班は長と二名一組の『組』二ヶに分ける。B29一機に1ヶ攻撃班が当る。そのうち一ヶ組が爆破作業実施、長と他の一ヶ組で、警戒支援、一ヶ組が爆薬を装着したことを長が確認すれば直ちに他の組が次のB29に向かって走る。確実に、しかも迅速に広大な引込線に分散して置いてあるB29を撃滅したいのだから余程要領よく手順よく考えて置かなければならない。

特陸隊員は士気、練度、体力並びに団結において何もいうことなく、陸戦に関しては既に充分である。戦時中の進級の早いこともあったが。約6%が准士官以上その他総員が下士官であるからその精鋭さを推して知るべしである。体力にまかせて走る、走る。必死の集団となると個人以上の力が出る。陸軍から派遣された数名の将校（義烈空挺隊員中、飛行機故障で引き返した者の中から選抜した人達であった。）下士官が訓練の援助に来て舌を巻いてこれもいうこと無しと。

一方飛行機の方は何といっても陸戦は苦手。同時に発進攻撃前進しても忽ち遅れて遥か彼方へ。可哀相の一語に尽きる。それでもやる気はどんどん盛り上がりすすんで夜間陸戦訓練に参加する。指揮官のところに希望や意見を述べてくる。一年半のS特訓練を身につけた者と航空員とが同様に陸上戦闘が出来る訳が無いので、予備弾薬隊的用法を考えていた。わが指揮官機の機長は国崎虔大尉（七一期舞）。飛行訓練の方は指導官厳谷少佐が肝脳を注ぎ尽くして、采配を振って居られる。燃料は当時としては潤沢にある。霧で支障があったが夜間訓練も着々進歩する。飛行時間だけから推し測ると、ベテランも居れば、まだまだの者も居る……。大型機種の操縦員でありながら三百時間そこそこの者も居たと記憶する。

その時、こりゃ大変だわいと思ったが、指揮官はそんなことを、おくびにも出してはならぬ、神助があろうと。指揮官は部下を信ずるのみ。

一方陸戦の勇士も機上ではちょっとした降下やパンクに青くなる者も出る。こんな点はお互いさまだ。そうして〝陸〟と〝空〟の仲はますます融和、団結の度を増してゆく。

陸上の戦術訓練のために、多分「彩雲」（偵察機）が撮った精巧な写真をもとにし、鳥瞰図を作製し、更に地形の模型を作る。サイパン島の模型は、精巧なものが既に完成して、持ち込まれ、アスリート飛行場の長さを一寸手直ししたのみであった。（これは陸軍は既に以前からサイパン島空挺攻撃を考えていたと思うふしがある。）テニアン、グアム島のものは、中央から派遣された模型作り専門家数名が、昼夜兼行で、忽ち立派なものを作り上げた。（従軍画家が五名も来て、この作業に参加してくれる。一水会の五味悌四郎画伯もそのうちの一人である）暗室で満月の明かり程度に照明して適当な角度から見る。双眼鏡を逆にして見ると遠影の感じが出せる。

斯くする間にも、三沢の天地には夏が駆け足でやってきている訳だが、何とも殆どそれを感じないのは、気が立っているせいか。心の余裕がないためか。

四、被爆と作戦規模の拡大

忘れもしない七月十四日の早朝。三沢航空基地は突如として三陸沖に秘かに接近した敵KDBの艦戦機の急襲をうけた。全くの不意打ちを喰った訳である。『八戸上空敵機編隊』の報が最初の情報で、その数分後にわが基地に在る陸攻は、執拗な銃爆撃に晒され、一～二時間の間隔をおいて来襲した二波の空襲によって折角不眠不休で改造し整備した陸攻二十五機の大部分が、それこそアッという間に地上において撃破されてしまった。全く惨憺たる有様である。被害を詳細調査の結果、陸攻二十五機のうち満足に作戦に使えるのは至急修理したとしても、七機である。幸いに基地全般を通じて、人員、施設の被害は無かったが、しばらくはくやしさに涙も出ない。報告の起案にも筆は重い。

しかし呆然として居ることは許されない。次の日には、早速3AFの三沢参謀と整備参謀が飛来打合せ。両参謀が中央で報告の結果、GBの渕田参謀（ハワイ空襲指揮官）と三沢参謀が数日後再度三沢基地に飛来され現地部隊との最終的打合せがある。『参加可能機だけで、予定通りの時機、七月下旬月明期（註昭和20年7月25日が満月）に決行するか、一ヵ月延期して8月の月明期に実施するか。貴官の意見はどうか』とGB参謀渕田参謀大佐は、穏やかな言葉で、指揮官の所信を問われる。うーん。どうしようか。小機数で決行しても攻撃の効果は薄いであろう。しかし戦勢の推移の激しい時機に一ヵ月延期して、果して作戦の実施が可能であろうか、飛行機のマリアナ基地到達は益々困難さを増すであろう。『兵は勢なり』〝勢〟に乗って、不十分のままでも決行すべきではないのか！。指揮官として最も判断に迷い、決心の難しかった一瞬……。

そうして次の瞬間、私の口を迸ったのは『参加可能機だけででも予定通

り、今月下旬作戦決行を可と認めます』という一見無謀の言。これは、作戦実施を一ヵ月延ばせば、それだけ生命が伸びるという期待を持つことが、心の底に沈澱している「生」への執着をかきたてることになる懼れがあり、ようやく固まっている作戦参加部隊員の覚悟をこの「勢」に乗って、不動のまま保つのでなければ、この作戦の実施はむずかしくなるとの判断もあったのである。

その席には渕田大佐、厳谷少佐、三沢少佐と私の四人。重苦しい沈黙の数分。しばらくして三沢少佐が口を切り、上級司令部としての発言、続いて厳谷少佐も意見を述べられた。それから冷静な再検討の結果、作戦実施時期を一ヵ月延期し、更に参加機数を大幅に増やして必成を期した方がよいのではないかという意見が出る。渕田参謀は、この打合せの結果を、その「空気」も含めて中央に持ち帰って上司に報告する、決行か延期かはその上で決定される、と三沢参謀とともに南に向かって飛び立たれた。その数日後「一ヵ月延期」の連絡があり、はじめて私以外の部隊員に対して経緯を発表した。

ここで、畏れ多いが、また陛下に対する軍令部総長の奏上文を拝借しよう。

「七月二五日一五〇〇、戦況に関し奏上」

『五、剣作戦ハ今次月明期ニ実施ノ予定ナリシ処七月一四日ノ敵機動部隊ノ三沢方面空襲ニヨリ陸攻一八機ノ被害アリ、百方手段ヲ尽セシモ天候不良及其ノ後敵機動部隊ノ策動等ニ依リ機材ノ準備間ニ合ハザリシヲ以テ準備訓練ヲ完全ニシ、本作戦ノ必成ヲ期スル為次期月明期間八月一八日以降ニ延期スルノ已ムナキニ至レリ』

G・Bからの命令は、七月二十七日午後「G・B電令作第一三五号」作戦緊急、軍機親展電報で届いた。その後若干のゆさぶりがあって、最終的には剣作戦の規模は次のように発展した。

㈠、編制　剣作戦部隊

第一剣部隊（指揮官呉一〇一特陸司令）一式陸攻三〇機

（飛行機隊長国崎虔大尉）。呉一〇一特陸三〇〇名。

第二剣部隊（指揮官陸軍大尉園田直）

（第二千歳航空基地）一式陸攻三〇機

（飛行機隊長、松原大尉）。陸軍第一挺進団の三〇〇名。

（註・園田直陸軍大尉は現在自民党代議士。挺進団は陸軍落下傘部隊。）

㈡、剣・烈の協同

烈は銀河三〇機（半数は機体下方に二十五ミリ機銃×二十挺装備、半数は小型爆弾多数搭載）をもって、マリアナ各航空基地を急襲し、機銃掃射並びに爆撃を行なう。

剣はその直後に各基地に強行着陸する。

イ、剣部隊の作戦

(イ)発進基地・木更津、厚木、香取

(ロ)攻撃部隊の区分

▲グァム攻撃隊―指揮官・呉一〇一特陸司令―兵力・第一剣の二〇機、特陸二〇〇名

▲サイパン攻撃隊―園田陸軍大尉―第二剣の二〇機、陸軍二〇〇名

▲テニヤン攻撃隊―先任中隊長―第一剣の一〇機、特陸一〇〇名。第二剣の一〇機、陸軍一〇〇名

（註はじめ、第一剣でグァム、第二剣でサイパンと考えていたが、原子爆弾搭載機はテニヤンから発進という情報に基づき、三ヶ基地に均等兵力を充当することに計画変更。）

―――○―――

○陸海軍の協同

第二剣部隊の陸戦部隊が陸軍、園田部隊に決し、指揮官園田大尉が三沢に進出して来られたので次の打合せを行ない、相互に了承した。

目標の配分と先任者統制

はじめの剣作戦では、二十五機全力でサイパン島一島だけを攻撃することにしていたから、攻撃目標の研究は進んでいたが、はじめての陸軍部隊には、地理的にも若干近く、よく情報を得ていたサイパン島攻撃を譲ることにし、海軍S特側はグァム島に行くことにした。八月六日の原爆投下後、原爆機はテニアンから飛来するらしいとの情報があったので、急遽、園田第二剣指揮官と相談して、第一剣、第二剣の各々から十機ずつを、テニアン島に廻すことにし、同じテニアン島の中では陸海軍の中で先任の中隊長が、その島の作戦の統制をとることに決定した。その結果、テニアン北飛行場海軍、南飛行場陸軍と攻撃目標を同島の中で二つに分けた。

極くあらましを書いたが、剣作戦も大きな作戦に発展したものである。更に少しく説明を加えよう。前述のように、可能な限りの大兵力を充当する方針で検討された結果、航空機側では渡洋作戦可能の一式陸攻六〇機の線が出る。それに対応する機乗陸戦隊員は六〇〇名である。ところが、わが一〇一特陸隊員は看護兵、主計兵を加えても三〇〇名しかない。よって、大本営首

脳部で合議の結果、陸軍の応援を頼むということになり、横芝にある陸軍落下傘部隊の第一挺進団の一部兵力三〇〇を海軍総隊の指揮下に入れ、これをもって第二剣部隊を編成し、それまでの剣作戦部隊に増勢する（G・B電令作第一三五号）ことになった訳である。七月二七日以降三沢基地は、陸軍関係者の往来も多く、七月末日には第二剣部隊指揮官園田陸軍大尉以下将校が三沢に到着、われわれと起居を共にして作戦の準備と実施に関して相互に研究し、検討し合う。模型を使って訓練をおこなう。流石陸軍落下傘部隊だけあって選り抜きの精鋭である。きびきびして挙措すべて見事、陸戦に関してはもとより満々たる自信。

これで、いよいよ「剣」作戦部隊の内容は充実し、当時としては最強のものとなり、士気まさに天を衝く。訓練は熱を帯び宿舎地区には鬼気さえただよう。

五、聯合艦隊司令長官の巡視

八月六日、G・B長官小澤治三郎中将の巡視がある。軍令部部員高松宮殿下、お付武官能勢省吾中佐、軍令部次長大西滝治郎中将、G・B参謀副長菊池朝三少将以下多数の御歴々が数機を連ねて飛来。分隊点検をうける剣部隊総員は、ようやく揃った作戦服装をして各機単位で整列。その顔は感激と緊張に硬ばっている。千歳から第二剣部隊の指揮官園田陸軍大尉のみ参列し、見事な現状申告をさる。

視閲訓練には烈（銀河数機）も参加（松島基地から）して三沢基地をマリアナ基地になぞらえて、作戦決行時と同じ要領で実施する。次々に着陸する陸攻から跳び出す陸戦隊員は、かねての計画通りに動いて見事な精兵ぶりを発揮する。訓練直後に基地の講堂で研究会が行なわれ、その空気は白熱そのもの。特に空挺部隊側の所見や希望に対して、最後に大西中将が、自からその項目一つ一つをとりあげて、中央の担当者に実現を指示された親心に部隊側は感激して、必成を期し、必死の覚悟を新たにする。

昼食時高松宮の御前の席に当てられて種々の御下問、陸戦隊員の飛行機搭乗訓練はまだ総員には行き渡らず、わずかながら未済のものがある旨御答えしたら以外に思われた御様子。夜の会食で菊池少将が美声を聞かしての「同期の桜」、長官が席を回って酒の杯を下さるのにその腕の長いこと。あの酒豪が殆ど飲まれなかった。そのあとで又夜半まで陸戦関係者の分科研究会があり、特に飛行機隊員の着陸後の行動基準について深刻な意見沸とう。G・Bの参謀から、地上攻撃行動中、負傷者が出た場合、附近の者がそれに拘っていては、タイミングを失するから、それにかまわずに進撃されよ云々の言あり。内心、何を言うかと黙殺した。あとで、第二剣部隊指揮官とこの点を話し合い、このことは特攻の部隊の指揮官にまかせておけばよいことでと二人でお互い話し合った一コマもあった。それはそれとして、この巡視で長官以下の方々に、これならゆける、と信頼感を持って戴いたのは事実のようだ。（本章、七、の参考文献を参照）

ところが、敵の進攻勢力の動きは己むところなくその翌々日にまたまた二日間に亘って北日本方面にKDBの空襲があった。室蘭、釜石には艦砲射撃があった。この時は前日に警報が入ったので、陸戦隊員も総員がかかって暗くなるまで飛行機の分散、機体の擬装に尽力する。このときの敵の攻撃は主として基地施設の破壊に集中されたようで、横空本部の施設は全焼したが、わが剣部隊の陸攻機には殆ど被害なし。幸なるかな。

発端の頃は兎に角おっとり刀で馳け出そうとする剣作戦だったが、決行が一ヵ月延期となり部隊は二倍に増強され準備は整い、訓練が精到となったこの頃になると、破邪の剣は研ぎ澄まされて回天の光を増して行った。

六、聖剣を捧じて

誰が発案したのか、われらの愛機一式陸攻の尾翼（方向舵）には太々と象徴的な文字が一機に一字ずつ鮮やかに印されている。

いわく、聖・剣・破・邪・闘・魂・炸・烈・必・成！また総員が集合するときには、その中央正面に高さ四米に及ぶ白木造りの『剣』が、でんと据えられる。これは、五味画伯の下絵をもとに、工作兵の大桑幸弘君等が精魂を込めて、作製したもの。夏の強い陽ざしに燦然と輝く！

さらに訓練指導にはG・Bの陸戦参謀浦部聖中佐、竹添少佐、二期予備学生陸戦班出身のA予大尉、義烈空挺隊生き残りの陸軍中尉等の方々が付き切り……。

出撃までにうんと体力をつけさせようと、給養は当時としては他に申訳ない程の飛び切り上等、酒もふんだん。サントリー瓶が何本か贈られた。G・B長官贈の四斗樽こも被りも到着。これは出撃の時に鏡を抜こう。出撃も間もなくだから、それまでは酢がこないだろう。

この頃、酒保開けがあって、士官室で飲むと、よく皆で合唱したのが、館山時代、小島中尉が仕込んで来た次の

歌であった。

「タンポポの花は可愛い、
タララランラン
春の乙女よ、心やさしくのびやかに、
姿やさしく、しとやかに、
咲いて、笑って、草蔭に
やさし香りの、ララ、タンポポの花」

この歌の調子はそのころの皆の心の緊張をほぐす可憐なものであった。

悲しいこともあった。訓練中二件の墜落事故。一つは七月二十四日離陸後しばらくして、エンジン故障（材料不良による発動機シリンダーの破裂の由報告を受けた）で海岸松林に墜落、搭乗員総員死亡、同乗の陸戦隊員は半数だったが三名死亡、二名重傷。次の日、基地内で葬儀を挙行。弔文を持つ手は震えるが、指揮官は心の動揺を示してはならぬと、毅然として「泣き言」を言わず。（第三編、慰霊編を）。

銃声は粛然と三沢の空にこだました。

一件は離陸直後に松林上に滑り込み。幸い怪我人だけで済んだ。（第二編、後藤大尉の記参照）。

ここらで情報について少々。

既に述べたように偵察機（彩雲が大部分か）からの航空写真は次々に新しいものが送られて来る（この写真を昭和五十二年になって手を尽くして探したが見当たらない。）それによって基地の変化状況が逐一判明するので、安心感を懐く。また二十九名にのぼるB29搭乗員の捕虜から得る基地の情報は、その活動状況、警戒状況、移住状況が手に取るようにわかる。この連中はなかなか「きさく」なもので三沢に来てから元気を回復し、（給食は剣部隊員とほぼ、同じものを与えた。）B29模型に対する警備の仮設敵になりましょうと、スポーツでもやるような気分。訊問は専ら厳谷少佐が得意の語学で当たっておられる。軍令部三部から佐藤通訳が派遣されて訊問に協力してくれた。

またまた本当に想像もしていなかったことだが、グァム島にいた整備員で、同島陥落後、山中に生き延びること数カ月、手製の筏で八名が脱出、漂流中に次々に倒れたが二名が奇蹟的に日本潜水艦（艦長折田中佐）に救助され（位置はグァム島と比島の中間）ウルシー攻撃を経て、内地に九死一生の帰還をしたという整備特少尉伊藤京一君が三沢に来て、島の詳細を復讐心に燃えて話してくれる。

なお、今までに触れていないことで重要なものを書き加えずばなるまい。

一式陸攻出撃時の重量は、過荷重十五・五トンぎりぎりの線、木更津発進後の針路は硫黄島一〇〇浬を離して、要所は超低空で突破、マリアナ群島東方から三群に分かれて、一気に各攻撃目標に殺到する。木更津を午後四時頃発進、サイパンなど三島に正子過ぎ強行着陸。そうすれば、黎明までに一暴れし、そのあと戦果拡充に努められる。

ところで航法の責任者国崎大尉以下の面々は編隊を敵に見つからずに、どううまく誘導して行くか、月明期でなければ夜間編隊が可能でないという搭乗員の平均技術からいっても全くそれは大変に心を痛めることで、その責任の重大さに思わず神に祈るという日々である。

搭乗員の中にはB29を奪って内地に持ち帰ろうと、真剣にその操縦法を研究している者もいる。またグァム島では、その地形上・人員潜伏の可能性ありと判断し、予め特定して、その者は山中に潜入して息長く抵抗を続け、潜伏斥候の役目を可及的に果たすことで、中央とも諒解ずみ。特に軍令部一部長は、敵の本土攻撃船団の動静を知り得れば有難いとつぶやかれた。これらのため通信機は精巧強力なものを携行する。

G・Bでは、手回しよく出撃時の諸手配に関する次の命令が出される。

『G・B電令作第一六五号』烈剣作戦ニ於ケル各隊ノ協同ニ関シ左ノ通定ム

㈠七一AB指揮官ハ在百里原第六〇一空戦闘機隊ヲ併セ厚木、香取、木更津基地ノ防空ニ任ズルト共ニ烈剣飛行機隊ノ発進ヲ掩護スベシ ㈡第七基地航空部隊指揮官ハ本作戦ノ間第六〇一空戦闘機約五〇機を百里原ニ移動シ71QAB指揮官ノ指揮ヲ受クシムベシ ㈢一UFB指揮官ハ本作戦部隊進出時七FGB指揮官ノ協議ニ応ジ輸送機約一〇機ヲ強力セシムベシ ㈣本作戦ノ間FGB指揮官ハ木更津ニ占位スベシ』

準備万端整う。聖剣正に鯉口を切らんとす。

―――○―――

飛行機隊の目的地到達に支援強力のため、次の二つが考えられて居り、関係者は成算ありと期待して居た。

①欺瞞通信、まぼろしの行動部隊を出現、敵を拘束する。

②レーダー反射箔散布の陽動機使用。

―――○―――

作戦に直接参加せず残留することになっているわが部隊の連中が、猛烈に直訴してくる。是非自分を連れていってくれと。軍医長、主計長、大発（舟艇）隊員、主計科兵曹など……。これには、ほとほと手を焼く。表面では頑として受け付けず聞き入れないが、彼

等の心中や察すべし！

或る時、私と二人きりのとき厳谷少佐が、自分も乗って行くつもりだ。陸戦になったら特陸司令の指揮下でいいのだと。目と目を見合って、堅く手を握り合う。言葉はない！

× × ×

この頃ショッキングな情報がきびすを接して伝えられる。

曰く長崎にも特殊爆弾投下！ ソ連参戦満洲侵入！ かくして、剣作戦部隊は、あと幾つ、食事をすれば、作戦決行だ、と刀の目釘を湿して、満を持している状態である。

遅れ勝ちだった吸着爆雷の数も漸く、整ったようだ。

繰り返し、攻撃要領の最後の詰めを行なう。

あとは、月明と、天候を待つ許りである。

八月十八日まで、あと四日間！

その時突如として、重大放送の報が伝達されたのである。

× × ×

剣を提げたが、遂に抜かず。

終戦詔勅を聞き奉る

七、参考文献

◎「回想の提督小沢治三郎」伝記の中の渕田美津雄大佐の文から抜粋させて戴いた。

「……

小沢中将が海軍総隊司令長官として就任した時、残っていた作戦らしいものは剣作戦であった。剣作戦というのは、元来、呉の第一〇一特別陸戦隊の三五〇名を以て山岡少佐の指揮下に斬り込み特攻隊を編成し、潜水艦でこれをマリアナ諸島のサイパン、テニアン、グァムのB～二九基地に送り込みB―二九の焼き打ちをやらせようというのであった。けれども敵哨戒機の潜水艦探知機の発達で、潜航中の潜水艦もすぐ発見されてしまうところから、潜水艦による接岸上陸は無理だということになって、一式陸攻三〇機でB二九基地に強行着陸することに計画が変更された。そしてこの部隊は第三航空艦隊司令長官寺岡謹平中将の指揮下に三沢基地にあって準備訓練中であった。

マリアナ基地に集中している一千機を越えるB―二九の本土への跳梁を制圧するには、もはやこの手より外にない。下弦の月明期を選んで、B―二九飛行機群の夜間本土空襲の帰りをつけて行く。所謂送り狼である。そして敵の着陸のあとにつづいて、こちらも強行着陸する。特攻隊員は四散して、各員が携帯する亀の甲形の吸着爆弾をそれぞれのB―二九の翼下に装着して爆破するという計画である。

小沢長官も非常に関心を示したが、特攻隊員は陸戦隊員三五〇名の外に、陸攻三〇機の搭乗員も加わるから総勢五〇〇名である。これが特攻に徹し切れるかどうかで長官は複雑な気持ちでいたらしい。たのもしい若者たちではあるが、ただ特攻機で突入するだけと違って、人間としての力の極限を要求されているのである。たとえB―二九全機の爆破に成功しても、あと生きて虜囚の恥ずかしめを受けるくらいならむしろ死んで幽久の大義に生きよとの鉄則がある。小沢長官はこの点について剣部隊の心構えはいいかねと繰り返し私にたずねる。作戦の外道は承知の上だが、おしつめられた戦いでとやかく言ってはおられない。これはひとつ陸戦は山岡少佐の指揮に委ねて、剣作戦全体と飛行機隊の指揮運用は、私にやらせて下さいと願い出てみようと心に定めた。

けれども剣作戦決行の直前である。七月一四日と一五日との二日間に亘って、本州北部と北海道一円は猛烈な艦上機の空襲を受けた。マッケイン中将の指揮する高速空母機動部隊の来襲であった。この空襲で折角準備した剣作戦の使用機は三沢基地で炎上してしまった。あと機材の補給は容易でない。剣作戦は八月下旬の月明期まで延期となった。そして陸軍から園田直大尉の指揮する三五〇名の空挺部隊も参加することとなった。

そうこうするうちに、B―二九の都市爆撃とならんで、機動艦隊艦上機の本土要地への来襲が繁くなって来た。ハルゼー大将の率いる第三艦隊機動部隊は、七月一八日横須賀軍港に来襲したのを手始めに、二四日呉軍港に来襲し、戦艦日向、伊勢、空母海鷹、重巡青葉等を撃破した。つづいて再び瀬戸内海に来襲し空母天城、重巡利根、軽巡大淀等を撃破した。これらの軍艦は浮かんでいたというだけで、燃料もなく、搭載機もなく、況んや艦隊としての組織的戦闘力も持たなかった屑鉄同様の存在に成り果ててはいたが、これで奇麗さっぱりと曽ての輝かしかった日本海軍の艦艇は消えてしまった。ただ一隻横須賀碇泊の戦艦長門は生き残ったばっかりに、後にビキニに引き出されて水爆実験の目標艦として、さらし首にも似た醜態をさらしてしまった。

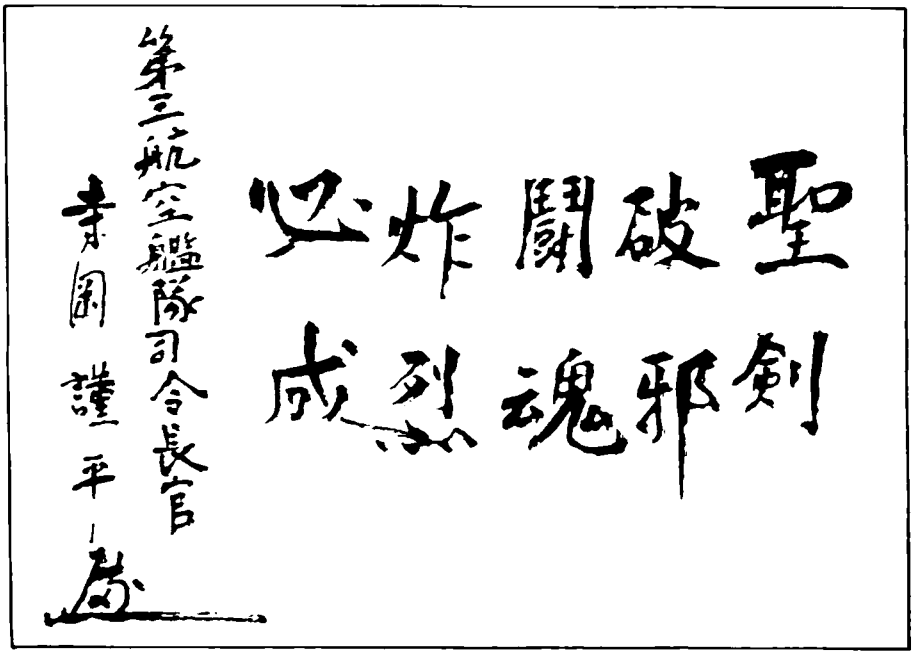
小沢中将に替って軍令部次長を継いだ神風特攻隊育ての親大西中将は特攻に熱心である。八月五日、寺岡第三航空艦隊司令長官の案内で、総隊からは

小沢長官、軍令部からは大西次長、それに軍令部参謀であった高松宮様をもお誘いして、木更津から松島基地に飛び、ここで訓練中の烈作戦部隊を視察したあと、翌六日は三沢基地に飛んで剣作戦部隊を視察し、七日に木更津に帰った。

烈作戦というのは銀河三十機で、剣作戦に呼応してサイパン、テニアン、グァムのB—二九基地に殺到し、超低空攻撃をかけて剣作戦を支援する計画であった。こうして一同は親しく両部隊を視察し、研究会にも臨席し、膝を交えて接した彼らに満足したのであったが、その八月六日に、広島に原子爆弾が投下されたのであった。そして、これを契機として急速に終戦へと進展したので、剣作戦は遂に実行に至らなかった。

夢！
にも見た、
月明下サイ
パン島に強
行着陸B29
爆破中の
特攻S特！

手前は着陸した一式陸攻機上にはためく軍艦旗と剣。
水平線上遠ざかるは「烈」の下方射。
中央はアスリート飛行場滑走路
左遠景はタポウチョ山



剣作戦に於て中隊毎の一式陸攻十機毎各に上記の十文字を一機に一字づつ機体に書き、シンボルマークとした。海軍の書道界の最高峰であられる寺岡中将が八十七才のご高齢で、五十三年正月本書の為に特に揮毫戴いたものである。

特攻人物伝 ①

義烈空挺隊長 奥山道郎大尉

田中 賢一

義烈空挺隊について最も驚嘆に価することは、特攻隊に指定されてから最後に沖縄に突入するまで約半年もあったということである。その最初はサイパンを狙い、それが取り止めになると今度は硫黄島を目標に準備を進め、それも立消えとなり最後は沖縄作戦に使はれることになる。基地も豊岡—浜松—唐瀬原—西筑波—唐瀬原—健軍と目まぐるしく移動する。最後の出撃で不時着生き残った者の述懐するところに拠れば、何処でもよいから早く使ってくれという気持だったという。第三独立飛行隊の方は途中で一部人員の入替があったというが、奥山隊は初の一三六人が一人の欠ける者もなく全員揃って最後の出撃をしている。この一三六名も偉かったと思うが、それを統率した奥山には全く頭が下る。彼は私より一期後輩の53期で、同じ聯隊に勤務した訳ではないが落下傘部隊の狭い所帯内に在って、高鍋あたりで親しく交る仲だった。

ここに私が直接見聞したことや、人を介して知った逸話など彼の人柄を偲ぶことを書き連ねてみたいと思う。私は昭和51年に「帰らぬ空挺部隊」と題し義烈空挺隊のことを一書にまとめて江湖に問うた。原書房で四版まで出したが、絶版となって今はない。その本の該当部分を引用するが、彼が挺進練習部教官時代の逸話は、同じく教官をしていた辻田信秋氏（少候19期、故人）の語るところに拠る。私はその頃まだ挺進部隊に来ていなかったので。

挺進練習部には、全陸軍の志願者の中から選抜された将校、下士官が入ってきた。これを練習員と呼ぶ。奥山は下士官練習員の教官を命ぜられた。浜松では手狭なので、16年5月には満州の白城子に移る。

練習員は、飛行機の操縦者と同様、志願をし厳格な適正検査を経て入ってきた人達である。飛行機の操縦ならば、たとえ飛行機に乗ったことのない者でも、どんなことをやるのか、概略は想像できる。ところが、落下傘降下となると、当時絵も写真もない。大空からフワフワと降りてくるのは快適だろう。しかし落下傘が開いてくれなければ、一巻の終りだな。これ位のことしかわからない。それを進んで志願して来た連中だから、大体似たようなタイプの人間が多い。

奥山は下士官練習員の教官をして、たちまち人気の中心となった。西郷南州を思わせるような、堂々たる風采。誰とでも気軽に話す闊達な性格。初めて接した者も、先づこれには引きつけられる。地上の準備訓練が数週間続き、いよいよ実降下が近づくと、誰しも心配がつのる。

「教官殿、傘は必ず開くでしょうか。」

練習員が奥山教官に話しかける。

「お前達心配か。物料箱を見ろ。物料箱は少しも心配していないぞ。あの気持で降下すればいいのだ。」

物料箱とは、兵器や弾薬を入れる特殊な箱で、これに物料用落下傘をつけ、重爆に懸吊し爆弾の投下装置を使って投下するので、等間隔に正しく開傘する。

〈無心になれ〉ということなのだろうが、それはなかなかむづかしい。

七月のある日、第二次練習員の教育中に、事故が発生した。これは奥山の担当した班ではなかったが、落下傘が足に巻きつき、初宿（しやけ）軍曹が殉職した。

この年の秋には、安全性の高い落下傘部隊用の落下傘ができたが、この頃はまだ九二式同乗者用落下傘を使っていた。この落下傘は胸掛式で、自動索が伸びきると傘袋が開き、中から小さな落下傘が飛出す。この小さな傘が主傘を引き出す仕組になっていた。

初宿軍曹の場合、この小さな落下傘が、足首に巻き付いてしまった。空中でこれを取り外ずそうと、もがいている間に、地面に激突した。衆人環視の中だった。この事故は、教官や練習員に大きな衝撃を与えた。

〈何パーセントかの確率で、こういう事故は当然発生するだろう〉

奥山はこう思ったが、教官としてこれは言えない。練習員の神経は高ぶっている。

事故調査も終り降下訓練再開となった。落下傘講堂に隣接した倉庫の前で、練習員が落下傘の配分を受けている。ここで落下傘をもらい、講堂の中に敷いたござの上で、二人づつ組んでこれを折り畳むのである。畳み終ったならば、傘袋の胸に接する部分に付いているポケットに、小手帳が収められているので、これに署名する。万一不開傘になっても、点検折畳については、自分が責任を負うことになる。

一人の練習員が、浮かぬ顔をして倉庫に戻ってきた。

「自分のもらった落下傘の番号は四

（死）でありますが、取り替えてもらえませんか」

豪傑を絵に画いたような顔をした助教が、「何だと！」言いかけた途端に傍から声がかかった。

「俺の使う傘を、練習員に配ってはいかん」

奥山教官は、無雑作にその傘を取り上げ、助教と組んで折畳にかかった。

初宿軍曹殉職の少し後、やっと待望の落下傘部隊用の傘が完成した。一式落下傘と言う。この傘は、背負式の主傘のほかに胸掛式の予備傘があり、主傘に異常があったときは、手で予備傘を開くという構造で、安全性は極めて高かった。

あるときの降下で、奥山の傘は瓢形開傘になった。瓢形開傘とは、吊索の何本かが傘頂部を越して反対側へ出たため、傘体が瓢簞形に開くことをいう。瓢形開傘になると降下速度が早くなり、悪くすると生命にかかわる。重量級の彼は通常の倍位の速度で落ちていった。

「予備傘を開け！」地上の者は大声で怒鳴る。待機中の救急車もエンジンをかける。降下場は騒然となった。当の奥山は、吊索をたぐりよせ、瓢形開傘を直そうとかかっている。降下高度五〇〇米。一人だけ他の者から離れドンドン落ちてゆく。地上の者は手に汗して見ていると、地上五〇米位のところで、奥山懸命の努力が奏功し、傘は正常の形に戻り無事着地した。

「何故予備傘を使わなかったのだ」かけつけた同僚の問に対し

「戦場では予備傘を使わんだろう。俺はあの方法で直せるかどうか試してみたのだ」事もなげに答える奥山の顔をみて、一同あきれた。当時、予備傘は訓練時だけ使い、戦場では弾薬などを持ち重量が著しく増加するので、使わないことになっていた。

註　この事例は第一回目の南方より帰ってからの事で、当時私は挺進練習部の本部で企画等の業務を担当していた。この降下訓練は中央から来た視察者に展示する為行ったもので、私も降下したので記憶に残っている。

話は遡り、16年9月末、挺進練部は白城子飛行学校から離れ、新田原に独立部隊としての看板を掲げた。唐瀬原を降下場として使用するためには、散在する松の木を伐採しなければならない。奥山はその作業隊長を命ぜられた。

伐採していくうちに、一きわ大きな古木があった。ここは陸軍用地ではあったが、近くの部落の入会権のようなものがあったのかも知れない。村民が言うには、――その木を切ると祟りがある。兵隊さん切るのはやめた方がよい。

そのとき土地の古老の述べた理由は、今詳かでないが、何か古い言い伝えがあったらしい。奥山は、祟りは直接伐っ者に対して及ぶのであって、ほかの者には関係なかろうと言い、自ら斧と鋸を取り、この木を切り倒した。

工兵である彼は、このような作業には馴れており、部下には全く手を触れさせなかった。傘の番号のことも、また木の祟りの問題にしても、奥山は迷信として一切を否定していたが、己の考えを他人に強要はしなかった。巧な機智をもって、他人を傷つけることなく処理していった。

16年11月26日日本政府はハルノートを突きつけられ、12月1日の御前会議で開戦の聖断が下ったのであるが、この日第一挺進団に動員が下令された。奥山はこの前から教導挺進第一聯隊第四中隊の副中隊長だったので、そのまま職で作戦部隊の一員となった。日本陸軍で副中隊長という職があるのは落下傘部隊だけで、これは中隊長が欠けても指揮が中断しない配慮からだった。なお私は練習員過程を修了し第一挺進団司令部部員に補せられたので、これから述べる彼の逸話は私が直接見聞したことである。

奥山の属する第一聯隊は南方へ向う途中で、乗船した明光丸が船火事を起し海没してしまった。人員は救助されたが戦力回復に手間どり、後発の第二聯隊にパレンバン作戦の功を攫われてしまった。

パレンバン作戦終了後団司令部は暫くマレーのスンゲーパタニーに留り、戦力回復した一聯隊をここに招致して待機していた。その頃南方軍総司令部の担当参謀が、次期空挺作戦について数案を挙げて意見を求めた。結局それらは帯に短し襷に長しで実現しなかったが、これらのことを過早に聯隊に示すと、血気にはやる聯隊が騒ぎ出すので団司令部では伏せておいた。

ところが奥山は、しばしば団司令部に現れ、どこからかこれを聞き出した。その一つに、一個中隊でベンガル湾に浮ぶアンダマン列島占領というのがあった。奥山はこれを早くやらせろと聯隊長に食い下った。

当時の聯隊長武田少佐。馬車馬の如く突進するので別名「馬車」と呼ばれ、頭ははげているが、心意気は奥山

と変らない。団司令部に対し同じようなことを要請したが、高級部員木下中佐は聞き入れなかった。木下高級部員は、武田聯隊長と同期生で、陸士三十五期の逸材。木下中佐の説くところは、こうだ。

——空挺作戦の実施は、上級司令部が広い視野をもって決定すべきことで、実行部隊は、自己の能力に照し、実行の能否を答えればよい。それに、アンダマン列島の占領など、恐らく総軍の一参謀の思い付きで、そんな支作戦に使う案は決裁されるはずがない。

——武田聯隊長は、一言もなく引き下ってきた。

そこへ奥山が乗り込んできて、アンダマン作戦の推進を団司令部にかけ合えと言う。武田聯隊長は、自分の考えはやや視野が狭かったかなと思っているところへ、十八期も後輩に当る奥山が、同じ議論を展開するので、すっかり不機嫌になった。自己嫌悪のような気分に襲われたのだろう。

奥山の方は、聯隊長の顔色など伺ってはいない。

「聯隊長殿が団司令部に行くのが嫌なら、私がかけ合ってきます」と極論した。この直情径行な聯隊長には、木下中佐のような理論的説得力はない。

「この馬鹿野郎め」忽ち奥山の横面に一発とんだ。奥山も負けてはいない。聯隊長をにらみつけて身構えた。幸なことに奥山は、聯隊長室に来る前に、同期生の竹内中尉に同行を求めた。少し遅れて部屋に入ってきた竹内中尉は、

〈これは撲り合いになる〉と驚いて奥山を聯隊長室から引張り出した。その場はそれで済んだ。

武田聯隊長は、愛すべき青年将校奥山中尉を、勢いあまって殴りつけたことについて、多少気がとがめることがあったのか、数日後聯隊副官神田中尉が病気入院したので、その代理として奥山を本部へ採った。聯隊副官という役は、人事庶務等の主務者で、奥山のような第一線指揮官型の者には不向きである。奥山も気が進まなかったが、一時的な代理だと言われ、大人しくその職についた。

スンゲーパタニーに約一個月待機したが、戦機に恵まれず、やがてビルマに転進を命ぜられた。鉄道輸送でバンコックに至り、そこで乗船、シンガポールを経由し、ラングーンに向かった。軍紀風紀の取締は副官の役目である。輸送間奥山は小まめに働き、彼の細心な一面を発揮し、聯隊長の信頼を得た。聯隊長と副官の呼吸はよく合っていたが、別に奥山がそのように努力した訳ではない。

「副官。ビルマは伝染病の多いところだそうだ。マンゴにやられても戦死には認定せんぞ」武田聯隊長は、実行力は旺盛だが、言うことが簡潔過ぎて、普通の人にはよく判らない。マンゴと戦死とがどんな関係にあるのか。ところが奥山にはよく判る。明光丸海難の災に遭った後、パラチフスが流行し、三分の一の者が罹病した。伝染病に対しては、にがい思いをしている。路傍で現地人の売っているマンゴなど、生物を食って病死しても、戦死とは認めぬと言うことである。

「聯隊長殿が、もしマンゴを食べられたらどうしますか」

「そのときは、拳銃で一発止めを刺して前進せい」

傍で聞いていた聯隊本部の下士官は驚いた。

〈マンゴを食えば銃殺されるのか〉

聯隊長が、戦場で伝染病で、倒れても、介抱などするには及ばぬということで、奥山にはよく通ずる。

註 私はシンガポールで第25軍が英軍の機関短銃を兵器庫にあるまま多量に鹵獲したというので、それをもらいに行って、聯隊の乗っていた輸送船がシンガポールに寄港したので、それを交付してラングーンまで乗船した。この間奥山とは毎日顔を合せていた。

奥山は毎日寝棚の間を縫うように、巡察して廻った。第四中隊に行くと、皆集ってきて色々なことを尋ねる。聯隊本部にいると、何か新しい情報でも知っていると思うのだろうが、船の上では何も特別なことは判らない。

「副官殿。ラングーンに入港したらすぐに作戦開始ですか。どこに降下するのですか」

「全く判らん。それに俺のことを副官などと呼ぶな、もうじき副官はやめるぞ。軍人の本当の姿は指揮官にある。副官適任などという奴は軍人の外道だ」

「奥山さん。今度の目標は何でしょうかね。本当に聯隊本部は、何も聞いていないのですか」一期後輩で第四中隊小隊長の副島中尉が話しかける。

「知らん。しかし俺には大体想像つくな。ビルマは広大な大陸戦場だ。きっと、一大殲滅作戦に参加することになろう。パレンバンは固定目標だ。いわば据物斬りだったが、今度は動く敵だ。それも、アメリカ装備の重慶軍で、強い奴だそうだ。俺は真先に飛込んでやるぞ」

高鍋町の下宿で一杯飲んでから、

「行くぞ！」と一声張り上げ、料亭に向う奥山の姿を、副島はふと思出し、この人なら恐らく戦場でも、あの勢で突進するだろうと思った。

「しかし奥山さん。副官殿が真先に斬り込んでは、聯隊長が困るでしょう」

「馬鹿言え。俺は上陸したら必ず副官はやめてみせる。中隊へ帰るぞ」

「そりゃア、わたしらだって奥山さんが中隊へ戻ってくれりゃア、こんな気強いことはありませんヨ」幼な顔のまだ残っている副島中尉は、奥山を兄のように慕っていた。

人の運命はわからぬものだ。これから一月後、トングー飛行場で副島は乗機が墜落爆死し、奥山がその骨を拾うことになる。

4月8日、ランゲーンに上陸。聯隊は市内にある英人の学校を宿舎とした。副官は嫌だと言う奥山も、誠心誠意活躍した。宿舎から程遠くない処に、英人の住んでいたらしい瀟洒な空家が見付かった。奥山は下見して、ここを聯隊長の宿舎とした。ラングーンは占領後一個月、第一線部隊は、北方に敵を急追中で、此所は兵站基地として活況を呈している。毎晩のように小数敵機の爆撃があるが、治安はよい。奥山は聯隊長を宿舎に案内した。隣は植物園で環境は良好である。聯隊長は御満悦だったが、フト反対側をみると高射砲陣地がある。奥山もこれには気付かなかった。

「副官！　何で高射砲陣地の隣に設営するのだ。馬鹿者め。」

武田聯隊長、体は小さいが声は特大だ。馬鹿者だけは余計だと思ったが、いたし方ない。奥山は走り廻って別の家を見つけ、お引越しを願った。

さてその晩、敵機は単機で来襲した。例の高射砲は盛んに咆哮している。聯隊長はそれみろと言わんばかりに、廊下に出て探照灯の光芒を眺めている。ところが皮肉なことに、どこを狙って落したのか、爆弾一発宿舎の前で炸裂し、ガラスの破片は聯隊長のハゲ頭を傷つけた。幸に軽傷だったので、衛生兵を呼んで手当をしてその場はそれですんだ。聯隊長は敵機の去ったアキャブ方向を睨みつけただけで、奥山には何も言わぬ。

奥山は内心ほくそ笑んだ

――好機到来――

翌日奥山は昨夜の出来事を聯隊の将校連中に大げさに話した。話はだんだんと尾鰭がついて、聯隊長が慌てふためいた様子が、面白おかしく伝っていった。噂はすぐに聯隊長のところにはね返った。

奥山の思うつぼである。

〈こんな奴、副官に使っていては、何をしでかすかわからぬ〉即刻中隊に追帰された。

もっとも、本職の副官神田中尉が、病気回復間もなく戦列に復帰できる見通しがついていた。

まだまだ面白い話は沢山あるが、旧悪暴露になりかねないのでこの辺でやめる。彼は決して所謂軍神ではなかった。

奥山が真価を発揮するのは特攻隊長になってからであるが、彼が19年12月部下中隊を率いて、サイパン特攻の為豊岡に向った以降、私は会ったことがない。冒頭にも申した通り私は義烈空挺隊について一書を出したが、それは主として不時着生残りの人から聞いたことで纏めた。ここに生残りのある小隊長の語るところを紹介しよう。

〝隊長は陸士53期、三重県出身、体軀堂々、風貌は西郷隆盛を髣髴たらしめる巨漢だった。放胆な性格、状況の如何に拘らず断じて右顧左眄しない挙措進退は衆心を憑いて行く器量の男、二十六の若さで散華した。（中略）

特攻指命から半年間、三度の攻撃中止、五回の基地移動、二度と踏むことなしと決意した唐瀬原に二度も戻りながらも、一名の落伍者もなく全一二機が健軍飛行場を出撃したのは、隊長の人間的魅力に負うところ絶大であったと思う。その人柄は強気一点張りの武人ではなかった。「何糞と頑張れKDの意気」と書き残している。KDとは幼年学校生徒、即ち自分自身に対する自分からの呼かけは、死地に赴く心の内を覗かせている。又十数名いた妻帯者のことについて、独身隊長は機会ある毎に「俺はいいよ、しかし妻帯者をどうして連れて行かなきゃならんのかナア」と。私も妻帯者の一人、もうそれだけで充分であった。不安、挫折感、懊悩等に直面したとき「何をくよくよ川端柳」の一言が、実にタイミングよく出る。それで万事雲散霧消、後に残るのが仰ぎみる富嶽の重きを感する隊長の存在であった。〟

私の人物評よりも、この小隊長の語るところの方が肯綮にあたっている。

沖縄出撃時の晴姿

学徒動員の想い出

元呉海軍工廠水雷部縦舵機工場
広島県立呉第一高等女学校四年
大林和子

第二次世界大戦の戦況は日毎に厳しくなり緊張の毎日でしたが、とうとう女学校四年、昭和十九年六月五日（当時十六才）初夏の風が快い朝、学徒動員で銃後の第一線に立つことになりました。

先ず三年生と四年生が、呉海軍工廠に動員がかかり、私のクラスは縦舵機工場へ配属されました。学業をなげうってお国のために奉仕するんだと、私たちは誇りと自尊心を持って張り切っておりました。

錨をつけた鉢巻きをしめ、上衣は制服、下衣は絣のもんぺ、左肩に防空頭巾、右肩に救急袋をかけ、底のすり減った靴を履いて工廠へ通いました。

海兵団の入口の方から廠内汽車が出ました。甲高くそれでいて響きの悪い汽笛を鳴らして、学徒をいっぱい乗せたその汽車は、造船部のドックの側を通り、造機部・水雷部を越して砲熕部の角を曲がり、やっと一番遠い「からすこじま」と言う海岸ばたの工場まで四年い組の女子生徒を運んでくれました。

工場に着くと「ヒューン・ヒューン」と圧搾空気の音が響いてきました。機械の廻る音、油の匂い、それらが入り交じってこれから毎日働く仕事場に、意欲と期待をそそりました。従来から来ておられる工員さん、女子挺身隊の皆さん、それぞれに慣れた手つきで銘々持ち場の仕事を頑張っておられました。徴用工員さんはざっくばらんで学徒に面白い話を聞かせてくれました。学徒と会話する時の工員さんは、楽しそうに嬉しそうに本音を出して話してくれました。大阪からきている工員さんが「一寸待って、えさかたづけるから」…何の事かと思うと、自分が昼食の弁当を食べる事でした。工場では、へちゃげたアルミの弁当箱に、大豆や麦入りの掻き集めなければ口に運ばれないような、ばらばら御飯の弁当でした。当時の女学生には「えさ」が自分の食べるものである事とは意味が通じませんでした。

又、夜勤の時内緒で古い油を使って石鹸を作っていたら、"ごり"が来て大慌てで隠した…… "ごり"とは守衛さんの事で一日五里位見回りするから付いた渾名だと教えてくれました。夜巡回されるらしく、見付かったら大事（おもて）やとそれでも出来上がった石鹸を見せて得意げでした。女学生の世界とは違った大人の世界を色々見せてくれました。

学徒を待っていたのは、九八式魚雷と二式の魚雷の縦舵機の調整をする仕事でした。九八式とは駆逐艦から撃ち出す魚雷で、二式とは飛行機から落す魚雷だと聞きました。いずれも魚雷が真っ直ぐに進むように舵をとる調整をする事でした。

スッパナや金槌など持った事もない女学生のこと、まず工具の使い方から指導を受けました。一分間に二万回位も廻る転輪、転輪の回転から三分の二秒という速さを感じ取ること、十分の一ミリのガタが手の感触として分かることなど、そんなに難しい仕事ではありませんが、精密機械の扱いに慣れるのは大変でした。魚雷が脇にそれずに真っ直ぐ進み敵艦に命中するように、毎日毎日調整の仕事をしました。

あれは確か十一月の初めだったと思います。五人の学徒がY工長に呼ばれて、何事かと恐る恐る行くと、

「君らには、これから〇六の仕事をしてもらう」と言われました。

〇六の仕事！それは秘密中の秘密の仕事でした。仕事の内容は、あの人間魚雷の縦舵機の調整です。五人は別室で仕事をすることになりました。それに加えて丸秘の仕事をさせて貰えると言うので前にも増して、学徒としての誇りに胸を湧かせ張り切って仕事に励みました。〇六では学徒一人に一人の割合で指導員がついて、とても親切な細かな指導を受けました。人間魚雷がどんな意味を持つものなのか、どんな仕組みになっているのか、そんな説明はさらさら無く、只々精密な機械の取扱いと技術を身につけるよう、そして敵艦に命中する縦舵機に仕上げるよう、厳しい毎日が続きました。

ある日の午後、戦闘帽に黒っぽい服、瞳の奥が妙に澄んで何かを思い詰めたような青年士官が、〇六の仕事場に入って来ました。つかつかと指導員の所へ行って縦舵機をいとおしむようにまさぐりながら、二言三言会話を交わして、側にいる学徒にも工員にも目もくれずさっさと出ていかれました。特攻隊員の一人だったのです。きっと自分と運命を共にする縦舵機について確かめたい事があったのでしょう。

私は、仕事の手をおいて窓辺に駆け寄りガラス越しに、先刻の青年士官を追いました。一分でも時を惜しむように足速に去って行かれる後ろ姿に、死を賭して何かを成し遂げようとする異

常なまでに強い気迫が感じられ、早く日本の勝利を、早く戦争が終わりますようにと、まるで自分の兄を戦場に送り出すような気持ちで、武運を祈り乍ら見送りました。工場の角に姿が見え無くなった時、私の頬を一筋の熱い涙が伝わったことに気付くものは誰もいませんでした。調整した縦舵機が事故なくまともに敵艦に命中したら、今去りゆかれた搭乗員は絶対に助かりません。敵艦諸共散り果てるだけです。もし途中で何らかの故障が起きた時は、引金を引いて自爆する以外はありません。一度命を受けて特攻隊員となったからには、諸々の想いを捨てて、その責任を果たす事で日本の勝利を確信して、そして軍神となるのです。当時、軍神は自他共にこの上なく名誉な事でした。

工場長O技師もよく〇六の現場へ来られました。縦舵機を見つめ学徒の作業の様子を見て行かれました。余り話をされる事なく、とにかく研究に研究を重ねておられるとの事、失礼だけど笑い顔など見た事はありません。両手を後ろに組み右肩を下げて、工場の様子を見廻っておられたあの日の光景がまざまざと浮かんできます。移り行く戦況がわかり縦舵機の性能の全てを把握されている技術者として、人の命との関わりに人知れない苦悩がおありだったと察します。

それから二～三日して、指導員のYさんが私達を水雷部の組立て工場の人間魚雷のところへ連れて行って見学させて下さいました。沢山の人間魚雷（回天）が整然と巨体を並べていました。巨体の銀色の光が何となく妙に冷たく感じた事を、今でもはっきりとその形と共に思い出す事が出来ます。前頭部には爆薬を詰める所があり、その後ろの上側に、人がやっと入れる位の丸い穴があって、そこから一人で入って行くと腰掛けるようになっています。身動きしにくい狭い中に腰を掛けるとやっと両足を伸ばせ、両足でも計器を操作出来るようになっていたようです。腰掛けた前に備え付けてある縦舵機の操縦桿を握り、潜望鏡と計器を頼りに爆弾を抱いて、自分で敵艦に体当たりして諸共に轟沈するのです。縦舵機の周りには、数へきれない程沢山の小さいパイプがつながれており、豆球がいくつも灯って中を明るくしていました。でもその明るさに私は不気味さを感じました。一度中に入ってハッチを閉めたら、泣いてもわめいても、どうあがいても、絶対に中からハッチは開けられないと言う事でした。

「お国のために」を合言葉に日本の勝利を信じて南方の海に人間魚雷と共に散りゆく若い搭乗員たち、彼等にも別れ難き多くの肉親がいたでしょうに。

〇六の仕事にも大分慣れた頃、五人の中のだれの発案だったのか、ある案が示されたのです。みんな賛成して次の日曜日にTさんの家に集まってその事を実行しました。

そのある案とは、本当に純粋な乙女の願いとして、回天（人間魚雷）の突撃が成功しますようにと血染めの鉢巻きを作る事でした。物資の統制下の事とて新しい布はなく、私は母に昔の着物の袖裏の白いもみの布を貰いました。それで丁寧に鉢巻きを縫いました。鉢巻きの中心に日の丸を血で染めました。自分で自分の小指を剃刀で斬って、したたり出た血でまるく布を染めて日の丸にしたのです。

直径九センチ位もあったでしょうか。気持ちは弾んでも、手が震えてなかなか実行出来ません。大きく息を吸って呼吸を止めて、小指の先を親指で強く押さえて痛みを感じないように、うーんと力を入れて、半分小指の先を見て半分目をそらして……指を斬るのには勇気がいりました。か弱き乙女たちは「必勝」と言う二文字にあやかって、勇気のある強き乙女となりました。奥歯を噛み締めて痛さと恐ろしさをこらえ、それぞれに思いを込めて、只々成功を祈っての行動でした。日の丸は赤すぎず黒すぎず清純な乙女の気持ちをそのまま写したような鉢巻きに仕上がりました。みんなはさっきの怖さも痛さも忘れて満足感に溢れていました。じっと見詰めていると日の丸の中から必勝と言う二文字が浮き上がってくるような、そんな錯覚におそわれました。

三年位前でしたか、同窓会で四十数年ぶりにTさんに会いました。何と言っても久しぶりで

「〇六頑張ったよね」

「あの時の剃刀の切傷が今も小指に残っているのよ」と話しました。

自分の血で染めた鉢巻きは、自分が調整した縦舵機を操縦して出撃する搭乗員に締めてもらうように指導員を通じて送りました。思いがけない学徒の行動に、指導員も感無量のようでした。特に呉県女ファンのNさんは、日を丸くして鉢巻きをながめ、「やったね。やったね」の連発でした。

勝利への期待に胸をはずませた毎日続くうちに、三月二十七日、私達にもいよいよ女学校卒業という春がやって来ました。本科終了の卒業証書授與式が（確か午後だったと思います）行なわれました。本来なら講堂でおこなわ

れる筈なのですが、運動場で行われました。始まって暫くしたとき

「ウ――ウ――ウ――」

と、警戒警報が鳴り出しました。もう式どころではありません。そのまま二河公園の防空壕まで、一斉に走って行きました。

こんな調子で動員中の事とて修学旅行はありませんでした。小学校卒業の時も……。大東亜戦争の始まる年ですから（昭和十六年）何かと緊張していたのでしょう。小学校の時も女学校の時も修学旅行がなかったのは、私達の学年だけではなかったでしょうか。戦争と言う時の流れに巻き込まれて…

「呉工廠は危ないぞ、大都市はみんな空襲を受けている。今度は必ず呉の番だ」と囁かれるようになりました。その頃、反戦争、反体制の様子がちょっとでも見えようものなら、直ぐに非国民として憲兵に連れていかれていたそうです。だから陰でこそこそと囁いていました。

その時期が何時であったかは、はっきり記憶がありませんが、取り敢えず学校に引き上げることになりました。学校はミニ工場となりました。化学教室の実験机の上に、ピストンを据え付けていたことを明瞭に覚えています。因みに、学校沿革史の写しによると、

「昭和二十年四月一日、学校工場（水雷部）として作業を開始す」

と記録されていました。

私達が学校工場で頑張っていた六月二十二日、呉工廠は大空襲を受けました。私達が働いていた工場も随分被害を受けたと聞きました。防空壕で挺身隊員や女子学徒が爆弾でやられたと聞かされました。

そして七月一日、呉大空襲……一夜の内に呉市は焼野原と化してしまいました。中通りも、本通りも、長迫の方も、二河のほうもみんな……学校であり工場でもあった県立呉第一高等女学校は、跡形も無く灰となりました。戦争は益々激しくなって、工場を無くした私達は阿賀の冠崎に移ることになりました。側に大入の魚雷発射場があるからです。長い間私達を指導して下さった方々とはお別れです。指導員はみんな山口県大津島の魚雷発射場のある訓練基地へ出張されました。学徒は民家に分散して宿を取りました。今様に言う民宿です。私達〇六グループは本家の柳原さんにお世話になりました。

何時掘られたのか山にはトンネルがあり、旋盤その他の機械を入れて作業をしました。トンネルには海からの風が吹き込んで、何とか仕事を続ける事ができました。冠崎に移ってからは〇六の仕事はしなかったと思いますが、仕事に就いての記憶は、悲しい事にもう薄れています。

来る日も来る日も、うだるような暑さの中、毎日大豆入りの麦ご飯と、いくら掻き回しても箸に具が当たらないような薄い醤油汁の食事、トンネルでの仕事、親元を離れた民宿暮らし、それでも「勝つ迄は、勝つまでは、絶対に勝たねばならない」と歯を食いしばって、

「月月火水木金金」の精神に鍛えられた動員学徒は、必死で頑張り続けました。

八月六日朝、良く晴れた暑い日でした。とつぜんに西の空にあがったきのこ雲！あれよ、あれよ！と、この冠崎から眺めました。原子爆弾とは露知らず、海田にある火薬庫が爆発したのではないかと噂しておりました。その後誰からともなく「ピカドン」という言い方で広島の惨事が伝えられて、怪しげな空気を感じました。それでも戦争に負けるとは露程も感じない女学生たちでした。

やがて八月十五日、終戦の日、Y工長が大事な放送があると言ってみんなに集合をかけました。あつい暑い日の正午でした。

でもジージー雑音が入って良く聞きとれませんでした。突然玉音放送と言われても何の事かさっぱり判りません。放送が終わって戸惑っている私達にY工長が、

「戦争が終わったんよ」

「日本は負けたんじゃ」

「もう仕事をせんでもええ」

「学徒は家へ帰れるよ」

と、力なく言われました。

今の今まで敗戦などと言う事は想像もしませんでした。必勝を信じ学業を捨てて、青春をかけて働いてきたのは何だったのでしょう。

自分の命を捧げて国を守ろうと散っていった多くの兵士たちの事をどう考えれば良いのでしょう。

全身の力が抜け、心の中にポカンと穴が開いたようで、何をする気にもなれません。恐らく日本中の国民みんながそんな気持ちであったと思います。みんなは、工場のあっちの隅に三人、こっちの隅に五人と固まってしゃがみこみ、ぼんやりとしていました。昨日迄、いや今日の午前中までは機械の騒音で活気のあったトンネル内は、機械も止まり、蝉の声だけが胸を刺すように響きました。良く晴れた青い空に白い雲、じりじり照りつける太陽とうだるような暑さの昼下がりでした。

どれ位時が経ったのでしょうか。機械工場の指導員Nさんが、浜辺に行こうと誘いを掛けて下さいました。〇六のみんなと砂浜に降りていきました。夕暮れの空には茜色の雲が広がり、青い海の色と相俟って絵のような光景を描いていました。みんなは砂浜に座り込んで、飽くことなく、その沖の海と空を眺め、波の音をぼんやりと聞いていました。

こんなに大きな変化が地球上におきていると言うのに、冠崎の海は何事もなかったかのように、

「チャプン、チャプン」と音を立てて静かに暮れていこうとしています。その時、

必勝――敗戦、必勝――敗戦心の中で何度も何度も繰り返しつぶやいてみました。信じられない敗戦の悲しみをこの海に溶かして流してしまいたいような、そんな衝動にかられました。

やがて、「もう帰ろう」Nさんは、私の手を引っ張って、海岸から上の道へあげて下さいました。乙女の胸に不思議な高鳴りを感じました。

長い戦いの全てが終わりました。

月日が流れて〇六の指導員は、もうみんな逝ってしまわれました。

またNさんは、戦後上京してデパートに勤めておられたけれど、その後の消息は判りません。そして〇六学徒の五人の内Sさんも病気で逝ってしまい、今は只過ぎし日の想い出を、追いかけ追いかけて、胸を熱くするのみです。

私は戦後幸いにも教職に就く事が出来ました。平和学習をする度に心は痛みました。私は、血染めの鉢巻きの事を一、二度同僚に話した事はありますが、その他の人や子供達に話した事はありません。

「敵艦に命中して下さい」

それは、取りも直さず

「貴方は死んで下さい」

と同じ事だったからです。

幼い時に

ススメ　ススメ　ヘンタイ　ススメ。

キグチコヘイワ　シンデモ　ラッパヲ

ハナシマセンデシタ。

と、学びました。

命を惜しまず、命はお国の為に捧げるものだと思い込まされたのは、実に教育の力であった事を改めて感じるものです。

けれども私は、小指を切って鉢巻きに日の丸を血染めした女子学徒の清純な行動と願いのあったことを、どうしてもどこかに書き止めておきたかったのです。

今、平和の世に生かされて、本当にあの事は、あれで良かったのだろうか、何度も何度も、自分に問いかけてみる五十年でした。

回天の英霊よ安らかに、全ての戦争犠牲者よ安らかにと祈りつつ体験記を終わります。

註　五十年と言う歳月は細かい事の記憶を失わせていますが、それでも心に残った事を書き止めました。

怨親平等の観音様（興亜観音）

（陸士61期）会員
奈良部　光孝

戦争によって生じた敵に対する怨念は、百年経っても消えず憎しみは心の傷として癒えることはない。

双方が心の底から許し合えるのには、どれ程の年月がかかるのだろうか。

思うに、戦争では敵も味方も夫々国家の為に命を捧げて戦ったのだ、従って、その戦いで国に殉じた英霊は崇高であり、夫々の国にとっては護国の神である。敵だからといってその国の英霊を怨むことはあってはならないという事を唱道した人がいた。

それは松井石根将軍である。松井将軍は昭和に入る前の時代から、当時欧米列強の植民地と化していたアジアを、アジア人の手に取り戻しアジア人によるアジア建設を主張していた。

ところが、共産主義陣営の策略により昭和12年日支事変が勃発し。松井将軍は断腸の思いであった。そして昭和14年将軍は、日本と中華民国の両国の戦没者を慰霊顕彰するため、観音像を建立することを思い立った。将軍は日中友好論者であったから特に日中の両国の英霊に対する思いが痛烈であったのだろう。

その観音像は、昭和15年に、戦場となった大陸の血に染られた土を素材にして造られ、熱海の伊豆山に建立された。興亜観音と名付けられた。

観音像と共に「日本国民戦没者霊位」と「中華民国戦没者霊位」の二つの位牌が並べて祀られた。毎年5月18日に例祭がその地において斉行され今日まで続けられている。怨親平等の権化である。

興亜観音のことは、残念乍ら戦後忘れられ勝であった。然し、松井将軍の

遺志と永く後世に傳えねばならぬという考えの人達が結集して運動を展開し、若い人達の中にも少しづつ理解者が拡まってきている。

松井将軍は、東京裁判において南京事件という名の虚構の責任を負わされ処刑された、誠に残念であり痛恨の極みである。その裁判において印度代表判事のパール博士は、明解に将軍の無罪を主張された。然し少数意見として取上げられなかった。今は亡きパール判事は、生前何度も興亜観音にお参りされている。大東亜戦争で戦った豪州の元将軍もお参りされている。

怨親平等は宗教を超えた尊い人類愛であり、興亜観音を通じて日本人の心を宣揚しなければならないと考える。将軍の遺骨も境内に埋葬されている。

興亜観音　所在地
〒413静岡県熱海市伊豆山一一三六

松井大将

特攻隊絵葉書発行に因んで①
――それらの絵にひそむもの――

田中　賢一

この度特攻隊に関する八枚一組の絵葉書を発行しましたところ、早速お買求めの方も尠くないようですが、ここに企画者として一言申上げておき度いことがあります。先ず、会員の三人の画伯にお願いして彩筆を振ってもらいました。これらを画集として出すことも考えましたが、敢て絵葉書としたのは、買った人がはがきとして使ってもらい度いからであります。そうすることによって我が会員以外の不特定多数の日本人に、特攻隊のことを知ってもらえると思ったからであります。絵葉書を入れてある封筒に刷り込んだ文面に、〝お国の為ということの、全く聞かれなくなってしまった今の世を、特攻の英霊はどのようにみそなわせ給うや。時弊打破の一助にと、願いをこめてこの絵葉書を世におくる〟と書いたのも、それが為であります。

1　式　戦

さて、絵葉書形式を採った為に、個々の絵に表現されていることの解説が著しく舌足らずになってしまいました、そこで、一般向けは別途考えることとし、会員諸兄に対しては―それらの絵にひそむもの―と題し、数回に分けてこの会報の紙面を使い解説したいと思います。

大戦末期に行われた特攻を、大別すると次の通りになる。

航空特攻
　敵艦船に対する体当り
　B29に対する体当り
　B29の基地に対する特攻攻撃
空挺特攻　義烈、薫等
水上特攻　震洋、㋺
水中特攻　回天、特潜、伏龍

敵艦船に対する体当り

特攻といえば、すぐにこの特攻を思う程人数と件数が断然多い。航空特攻が正式に計画実施されたのは、19年10月から始まった比島方面の作戦からであるが、それ以前にも陸海軍とも、搭乗者が自主的に行った体当り特攻が数件ある。

比島方面航空作戦に登場した特攻隊は、海軍は主として現地の第一及び第二航空艦隊で編成した第一～第五神風特攻隊で、これに内地で編成した増援神風特攻隊が加わり、特攻未帰還機は三三三機四一五柱となっている。一方陸軍は富嶽、万朶両隊を筆頭に内地で編成したものが大半で、特攻未帰還二〇二機二五一柱である。陸海軍合せて五三五機が特攻未帰還機と記録されている。

敵艦船就中空母に対する体当り攻撃以外に傾きかけた戦局打開の途はないと、戦法として正式に取り上げたのは、1航艦長官の大西滝治郎である。10月20日関行男大尉を隊長とする、敷島・大和・朝日・山桜より成る神風特攻隊が編成された。この部隊は21、23、25日と、続々敵艦目がけて突入していった。

今日咲きて明日散る花の我が身かな

如何でその名を　清くとどめん
　　詠人不知

このような精神で若い特攻隊員は陸続と出撃していった。

陸軍の第4航空軍は、一航艦に先を越されたが、内地から到着する富嶽・万朶以下の諸隊を掌握し特攻作戦に転じた。これらの部隊は11月5日、7日と、次々に出撃していった。

大君のみことかしこみ今日よりは
　火玉となりて　我は征くなり
　　万朶隊長　岩本益臣

しかし悲願空しく、比島方面の大勢は決してしまった。その後は、硫黄島近くの洋上で海軍第2御楯隊の果敢な特攻作戦を経て、愈々沖縄方面航空作戦に移る。

沖縄方面航空作戦を担当したのは、第五航空艦隊と、聯合艦隊の指揮下に入った陸軍の第六航空軍で、これに台湾の第八飛行師団が参加している。

この航空作戦は特攻を主軸にして行われた。敵が沖縄本島に上陸したのは、20年4月1日である。敵の上陸を許しても後続を洋上に断てば、最終の勝利を得る見込みがあると、次々と特攻機を繰出し死力を竭して戦った。陸海軍とも練習機や性能の劣る飛行機まで、爆装して体当り機とした。

敵上陸後の航空攻撃を、海軍は菊水一号、二号と呼び、沖縄地上の第32軍の組織的戦闘が終結する6月23日までに、菊水十号に及ぶ特攻作戦を行い、陸軍航空もそれに合せて作戦を実施した。敵上陸前の3月中旬より終戦までに、沖縄方面に特攻出撃して未帰還となったものは、海軍一〇〇五機一九八一柱、陸軍八八六機一〇二一柱である。

南九州における特攻発進基地は次の通りであり、記念館や記念碑等が建てられてあり、毎年祭典が行われている。

〔海軍〕鹿屋、串良、宮崎、国分、十三塚原、出水、指宿、宇佐、築城

〔陸軍〕知覧、万世、都城、新田原

最後に一つつけ加えておき度いのは「桜花」のことである。これは海軍が開発したロケット推進の一人乗り体当り機である。一式陸攻に懸吊して目標の手前30キロまで行き、切離すという構造になっていた。

3月21日、敵機動部隊攻撃の為神雷部隊と称する桜花懸吊の一式陸攻一六機が戦闘機一〇機掩護のもとに鹿屋を発進したが、目標の手前100キロ位と思われる地点でグラマン五〇機の攻撃を受けた。桜花に特攻隊員が移乗する以前だったので、之を切離し防戦これ努めたが遂に全機撃墜されてしまった。

鹿屋郊外神雷部隊宿舎跡に桜花の碑がある。

B29に対する体当り

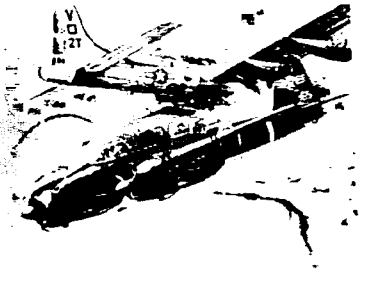
B29に対する体当りは、震天制空隊や回天制空隊のように事前に準備した組織的なものと、操縦者が決心して咄嗟に行ったものとがある。これらについては、この会報16、20、23、25、29、30、31号に掲載してあるので、会員は既に御覧になっておられると思い、ここ重複解説はしない。ただ残念に思うことは、敵艦船に対する体当り特攻については鹿屋、知覧、加世田（万世）に立派な資料館があり、そのほか南九州の発進地には碑が建っており、後世に語り伝えることができるが、B29体当りについては、そのような施設は皆無である。空襲の悲惨さを伝える施設はあっても、身を捨ててそれを防ごうとした人のあったことを、日本人の脳裏から消えてしまうことを恐れる。

B29の基地に対する特攻攻撃

第一御楯隊のことについては29号と30号に詳述してあるので重ねて述べない。B29の基地に対する攻撃は、これ以外に特攻扱にされてはいないが、陸海軍の小数機による爆撃があり、大半が未帰還となっている。これらのことも、27、28、29号に掲載済である。

なお、航空特攻の絵を画いて下さったのは、少飛会の海法秀一画伯である。

この記事は紙面の都合で今回はこれまでとし、次回以降「空挺特攻」「水中特攻」「水上特攻」と順を追って解説してゆく。これらの絵葉書は八枚一組封筒入りで、手渡400円、郵送500円、事務局で頒布している。



2式複戦

零戦

反日歴史教科書の是正について（二）

元防衛大学校教授　桑田　悦

一、現小・中学校歴史教科書の問題点は今回新たに登場した前記記述に止まらず、広く深い

今回新たに採択された中学校社会科（歴史分野）の教科書とともに、東京都の区の全部と市・郡部の大部分で使用されている小学校社会科（歴史分野）の教科書を読み直して見ると、余りにも当時の国際環境の実際を無視して過去の日本を罪悪視する反日的史観が全体、特に近・現代史の部分を覆ってるのに驚く。我々世代が当面の日本の復興に血眼になって努力している間に、我々の子供達・孫達が心ない日教組等の手で歪められた歴史観を注ぎ込まれていたことに改めて驚かされる。

先に述べた占領間は「日本弱体化政策」に基づく「東京裁判史観」によって、独立回復後には共産陣営の勝利に貢献し革命成功後の自分達の立場を有にしようとする「マルキシズム史観」によって、当時の国際環境を無視して総ての罪を日本の罪とし日本人の愛国心を消磨させようとする歴史教育が浸透してきた結果である。

すべての記述を再現するには余りにも多くの紙数を要するから、共通的問題を具体的に示すに止めるが、どうか皆様御自身の目で点検して戴きたい。

明治維新の取り扱い

列強の植民地獲得競争の波が東北アジアに及んだ切迫した国際環境の渦中で独立を維持するための、中央集権の近代国家への脱皮・富国強兵政策の急務が強調されていない。高杉晋作はアヘン戦争直後の上海の英国租界で、中国人が奴隷の如く扱われている実情を見て日本に迫る危機を警告したのだが、もちろんこれも書かれていない。

教科書ではペリーの来航は書いてあるが、「開国によりヨーロッパの国々やアメリカとの貿易が始まると、物価が上がり、人々の生活は苦しくなりました。人々の間には良い世の中にしたいと『世直し』を求める動きが高まり、各地で一揆や打ちこわしが起こりました。」を討幕運動の原因とし、挿絵の図解では討幕の原因として、大…幕府をたおそうとする若い武士の運動、中…欧米諸国の進出（開国）、中…農民一揆打ちこわし、小…蘭学、小…国学の五つを挙げている。これでは若い武士たちがなぜ幕府を倒そうとしたのかがわかるまいし、国内経済や農民一揆・打ちこわしが大事な要因と誤解しかねない。

明治維新の原因の記述がこうだから武士階級の自己犠牲による大変革の円滑な進行が全く書かれていない。徳川慶喜が自ら大政奉還した意味も、雄藩が自ら献兵・藩籍奉還した理由も、維新を推進した武士階級が自ら武士の特権を捨てて四民平等を推進した理由も判らない。

フランス革命やロシア革命等々のような膨大な流血も、革命を推進した階級が旧階級を殺害した血なまぐささも少ないままに、アジア最初の四民平等の立憲主義中央集権国家が誕生し、富国強兵が推進されたことは書かずに、自由民権拡張の不十分さのみを強調したのでは、明治維新の実態は子供たちに判らないだろう。

あの時期にアジアで始めての立憲主義近代国家が出現した意義も、そこに至るまでの志士達の苦心と大局的な志向とは世界に誇り得るものだと思うが、それは全く強調されていない。逆に美化されたフランス革命と階級闘争史観から、明治国家を古い絶対制と規定して民主化の不徹底の指摘と一揆礼賛に懸命である。

不平等条約の改正の苦労

日本も徳川幕府の手で結んだ通商航海条約では、領事裁判権を認め、関税自主権を奪われ、外国人居留地に駐兵権を認めた不平等条約であった。明治四年の岩倉訪米はこの不平等条約改正を目的としたのだが、訪米の結果、欧米並みの法秩序体制を整備しなくては条約改正は不可能と判り、欧米視察―日本の近代化を目指すことになった。以後教育の普及、立憲政体の確立、法秩序体制の確立等を経て明治二十七年に治外法権を回収し、関税自主権は明治四十四年に完全に回収された。

その間の苦心を全く書かないから、辛亥革命の後の中国がコミンテルンの指導に従って、国内の法秩序の確立には全く努力を放棄しながら一片の通告と暴力的手段で国権の回収・不平等条約の改正を進めることに対して、日本人の国民的共感を得られなかった事情は理解できないだろう。

日清・日露戦争の侵略戦争視

日清・日露戦争までを日本の大陸侵略の始まりと位置付けており、維新当初に新政府が支那・朝鮮と鼎立して近代化して列強の植民地化を阻止したいとの志向が挫折するに至った事情を無視している。私財を投じて朝鮮近代化を支援してきた福沢諭吉が、清国の事大主義的干渉によって朝鮮近代化・独立派が壊滅してしまった落胆から「脱亜論」に転換せざるを得なかった心情をおもいやりもしない。

欧亜を通ずる大国ロシアの朝鮮支配を拒否するために開戦し、苦心惨憺の

末に辛うじて勝利の終末に辿り着くまでの政略・戦略の苦心にも触れていないし、世界史で始めて白人の侵略を撃退した意義、それが被圧迫民族達をどれほどに鼓舞したか、そのために身命を捨てて戦った勇士達の献身奮闘にも触れていない。

大正・昭和初期の国際環境の実態と父祖の苦悩の無視

大東亜戦争に至るまでの歴史は痛嘆に耐えないし、その間の日本の国家意志の決定も各種行動も十分に賢明だったとは言えないが、現用教科書ではその間の国際環境の実態にも我々の父祖の苦悩にも触れずに、ただ憎しみの目で日本の悪行のみを糾弾している。

ロシア革命とコミンテルンの影響

（教科書にはコミンテルンの名称も登場せず、ましてやその指導・援助による日本共産党・中国共産党の創設も書かれていない）、その指導の下に行われた革命中国の革命外交への対応の父祖の苦悩も、ウイルソンの性急な理想主義外交理念と現実の先進諸国の利益を重視した国際政治、米国の抱く中国・共産主義への幻想に翻弄された苦心、資源のない狭い国が世界恐慌とブロック経済に翻弄されての苦悩等々の我々の父祖の苦悩を学ばないで、本当の歴史の教訓が得られるものだろうか。戦時下の国民生活と近隣諸国民の苦難だけを強調して、世界史にも稀な大量の玉砕・特攻に身を捧げられた方々の人間的悩みと心情に触れないで、果して本当の平和を期待できるのだろうか。ワシントン体制が当事者ソ連を除外し、コミンテルンや中国の革命外交を予想していなかった基本的欠陥、パリ不戦条約が、侵略戦争か否かの認定を当時国の認定に委ね、アメリカは南北アメリカ州への他国からの干渉に対する措置を、イギリスは重要な植民地の保持のための措置を自衛行為と認めるという付帯条件付で批准された事実も示さないで、南満州権益の自衛措置だけを一方的に侵略行為と非難したままでよいのか。日支事変の平和解決に日本がどれだけの努力を払い、にもかかわらず国共内戦で追い詰められた中共の再起のために抗日民族統一戦線を維持する立場や、事変の泥沼化による日本の疲弊を利益としたコミンテルンや英米等からの妨害が事変の早期解決を妨げたことを無視してよいのか。こういう点までの目配りこそ、将来の平和維持への教訓になるのではないのか。

「特攻」に関しては日本書籍版中学社会科教科書に「戦闘機で敵艦に体当たりする特攻攻撃で多数の若い命が失われた。（266頁）」とあるだけで、他社の中学校教科書には全く書かれていない。戦場の兵士に送られた国民学校生徒の慰問文、戦死者遺族の国民学校女子生徒の慰問文に「お父さんのように戦死なさらないで下さい。私はお父さんのことを思い出しますと時々泣きます」とあることから戦意に妨げありとして先生から返された事例、終戦を喜ぶフランス小学生の手紙等が一頁にわたって掲げられていることからすれば、国家と家族の安泰を祈って特攻に散られた御英霊の遺書のいくつかは載せられるべきではなかろうか。

日本弱体化工作に触れずにただ現憲法礼賛で良いのか？

「占領軍はその安全に重大な危険がない限り、占領地の現法秩序を尊重しなければならない」という陸戦法規を無視して、占領軍の厳しい言論統制と指示の下に作られた現憲法を、ただただ礼賛する記述で良いのか？既に多くの有識者の研究でその言論統制の実態も、憲法制定の経過も明らかにされ、国民の過半数が憲法改正に賛成だというのに、これらの学術的成果を無視し、連合軍の「日本弱体化工作」に基づく違法な「占領憲法」・「東京裁判」等をただ礼賛していて明るい日本の将来は開けるのだろうか？

神話の無視と古代―近世史の問題

国産み神話は民族のロマンとしてほとんど総ての国で語り伝えられ、教科書にも登場している。それなのにわが国では占領軍の「神道指令」以来、民族の伝承としても教えられていない。

また古代から近世に至る歴史の中には、個々の事象とともに、自然と共生し、外来文化も広く吸収し、神仏混淆等にも現れた宗教的寛容性と、武士道や石田心学にも表れた勤勉・思いやり・犠牲的精神・品性を育んだ伝統的文化の香りも高い。そういう我々の先祖が育んだ美点をも学びたい。

二、偏向史観からの脱却から日本再建は始まる

最初に述べた「名誉と威信を放棄し、忌まわしい事件の頻発する日本」から「誇りと祖先への感謝に溢れる明るい日本」への転進には「偏向した歴史観から脱却して素直に広い視野から事実に即して日本の歴史と父祖の悩みと努力の跡を振り返る」ことが第一歩である。諸悪の根源は、「日本弱体化」と「共産陣営への奉仕」を目指して戦後続けられてきた「東京裁判史観とマルクスシズム史観との結合」である。

これらで培われた「過去の日本をひたすら罪悪視し、日本さえ何もしなければ世界は平和である」とのマインド・コントロールから脱却しなければ、絶えず変化してゆく国際関係の現実に応じて「如何にして現実の世界の一国として日本の活力と繁栄を維持しつ

つ、その特徴に応じて世界人類の平和と安全の維持に貢献すべきか」という健全な自主的思考が働かないのである。

元慶応義塾塾長小泉信三氏は「マルクス死後五十年」（角川文庫、昭和二十六年）の中で、マルクスの著作の学術的貢献と弱点を指摘しつつ、その論文・手紙等からマルクスの人柄について「マルクスは人を愛さぬとは言えないが、より多く、より強く憎み、嫌う型の人物であったように思える。彼は共産主義社会の善美に憧憬しないわけではないが、遙かに強く資本主義社会の醜悪に反感を感じた。……マルクスシズムが一部の思想家に歓迎される所以は、それが最も強き否定の哲学であることにある。」と述べている。マルクス主義に傾倒された方々の著作物には「否定・嫉妬・憎悪」の傾向が極めて強く、現状の否定・批判には極めて熱心だが、現実を着実に改善してゆく努力には不熱心でその発現の及ぼす結果には責任をとろうとしない方々を見かけることが多い。

フランスでもロシアでも中国でも、一応革命が成功するまでの犠牲はそれほど大きくはなかった。だが敵対政府を打倒し革命が成功してから、革命政府内の主導権をめぐって激烈な内部闘争が起こり、その内戦等を通じて多くの人命が奪われた。フランスではナポレオン帝政・ヨーロッパ全域にわたる征服戦争⇩共和制⇩帝制と度々変転した。ロシアではスターリンの独裁制に移行して農民からの収奪による殺戮の全国化⇩度重なる粛清・収容所列島化が起こった。中国では毛沢東の大躍進政策の過ちと文化大革命を通じて幾千万の人民の餓死、産業と人材養成の停滞が生じ、後継者をめぐって混乱が繰りかえされた。長期の東西冷戦の中で、共産主義経済の停滞・敗北が明らかになり、歴史の実験を通じて既にマルクス主義の誤りは明らかで、共産国家は総崩れになり、僅かに中共と北朝鮮のみが共産主義体制を維持しつつ「改革・開放」政策に活路を見出そうとしている。日本国内でも今やマルクス経済学を学ぼうとする学生はほとんどいない。その世界的傾向の中で、依然として自分の人生が崩れまいと一部の人達がしがみついているのがマルクス史観であり、窮余の策としての中共に対する奉仕だろう。東西冷戦中の彼等の言動を思い起こしてみるべきである。

三、反日的教科書是正への具体的方法

いたずらに悲憤慷慨していても救いはない。我々は特攻勇士の英霊に応えるためにも、憂うべき現状を打開して祖国の明るい明日を迎えるために微力を尽くすべきではなかろうか。まず着手すべきは反日歴史観の是正であり、既にマインド・コントロールされきった層はともかく、その周辺の大衆と未だ思考の柔軟性を失っていない多くの人々が正常化すれば、票を失うことに汲々として左翼的言動に媚びる政治家の大多数は姿勢を変えるだろう。

（一）同志的団体への参加と支援

戦後数十年間にわたって日本社会の多数を占めるに至った左翼的勢力のマインド・コントロールから脱して反日的歴史観を是正し、ここから生じた各種の歪みを是正して正しい日本の歴史・伝統に沿った誇りある明るい日本を再建してゆくには、悲憤慷慨だけでなく、我々の不得意とする大衆への啓蒙活動等々をも通じて、まず当面の反日的歴史教育を是正し、国民大衆の歴史観の是正、戦後の虚構の是正を図ってゆく巨大な国民運動の展開を必要とする。反日的歴史教育の是正だけでも、無国籍的教育基本法の改正、中国・韓国等に教科書の内容の内政干渉を許した宮沢・河野官房長官談話の過失の責任追及と是正、反日教科書を作成・選択させるに至った文部行政の是正、適正な歴史教科書の作成とその採択等々の措置を必要とする。そのためにも各個人がそれぞれに活動するだけでなく、次に例示するような同志的諸団体への参加・支援協力が必要である。

直接的に偏向教育の是正を図る団体

○自由主義史観研究会（代表…藤岡信勝東大教育学部教授、事務所…〒113、東京都文京区本郷3―16―6―504、TEL03―5800―8515）これは現場の小・中学校・高校教師等とこれに共感する大学の教育学関係者ならびに一般支援者を中心とする団体で、偏向した歴史教育を是正し生徒達の公正な判断を導き出すことを中心目標とする団体で、明治図書出版社から既に「近現代史の授業改革」「歴史ディベート記録、大東亜戦争は自衛戦争であった」等の単行本、「近現代史の授業改革」第1―第7号を公刊したほか、産経新聞社から「教科書が教えない歴史」第1―3巻を出版し、教科書で採り上げることの少ない「こどものための歴史シリーズ」（偉人伝）の出版を準備しており、また毎年の総会、研究会等々で具体的な実践活動の論議を活発に展開している。従来伝統的に日教組等を支援・指導してきた左翼陣営からは「大きな敵」とみなされ各種妨害を受けている。

○新しい歴史教科書をつくる会「会長…西尾幹二電機通信大学教授、本部事務所…東京都文京区本郷3―17―8吉沢ビル2階、TEL03―5800―8552）

昨年暮れ、約百名の発起人で結成の記者会見を行い、本年三月設立記念シ

ンポジュウム、同六月末に第二回シンポジュウムを行うとともに、元東大教授伊藤隆氏、拓殖大学教授井尻千男氏等近現代史専門家等の手で来年中の完成を目指して「近現代史」の作成に努めており、その教科書完成され多く教育現場で使用される日の一日も早いことが期待される。

歴史教育の是正のために文部省・政党等に働きかけると共に、広く与論の善導、日本再建を目指す諸団体

○日本会議（旧称、日本を守る国民会議、会長…塚本幸一、本部…東京都目黒区青葉台3―10―1―601、TEL03―3476―5611）

黛敏郎日本を守る国民会議会長逝去後、塚本幸一会長・小堀桂一郎副会長の下に再編成し「日本の息吹」を機関誌とし、政界・学会各位の御協力を得、各都府県にも支部を設けて活動中で、「天翔る青春」等々ドキュメント映画・ビデオ・図書等を発行し、中央集会・全国縦断キャラバン隊等々を行い啓蒙・活動に努めている。

○日本政策研究センター（所長…伊藤哲夫、本部所在…東京都新宿区神楽坂5―32近江屋ビル5階、TEL03―3268―6450）

機関誌「明日への選択」を発行し、地方各地にも支部を設けて「日本再建ネットワーク」を構成し、反日史観是正と明るい明日の日本を目指して活動している。

○日本青年協議会（会長…椛島有三、事務所…目黒区青葉台3―10―1青葉台上毛ビル602号、TEL03―3476―5711）

機関誌「祖国と青年」（月間）を発行するほか、各地でセミナー・講演会等を開催して与論の善導に活動している。

○日本世論の会（会長…柴田正、事務所…東京都港区高輪3―25―27アベニュー高輪704、TEL03―3442―2205）

機関誌「世論」（パンフレット）発行による啓蒙活動のほか、NHK、朝日新聞社等マスコミの偏向報道に対する抗議活動等で世論の善導に努めている。

○昭和史研究所（代表、中村燦独協大学教授、事務所…東京都中央区銀座2―8―12チャンドラボースビル5階、TEL03―3563―1444）

旧日本軍関係者の証言・資料等を収集整理・研究して偏向した史観の是正に努めるとともに、「NHK報道を考える会」を組織してNHK等の偏向報道の是正活動（偏向報道を改めるまでの受信料不払い運動を含む）と偏向教科書による公教育を阻止するための訴訟等の活動を通じて反日的教育是正に努めている。

その他○英霊にこたえる会、○日本郷友連盟、○各戦友会等々でもこれらの団体と協力して英霊の顕彰、歴史・伝統の尊重、反日的歴史教育の是正等に活動している。

（二）現場の小・中学校教師の教育活動への啓蒙・協力

私は反日的教科書が採択されるに至った経緯とそれに基づく反日的歴史教育横行の問題について、東京都教育委員会、世田谷区教育委員会、世田谷区教育委員会の社会科指導に当たってきた中学校長・指導主事等に面接してきたが、それらの指導者・管理者達は自身がマインド・コントロールを受けてきた世代であるだけでなく、責任が自らに及ぶことを恐れる姿勢のみ強くて、まともな反論もしないだけでなく、無責任な姿勢が強く、改善の熱意はほとんど感じられなかった。

これに反して、孫の通う小・中学校の現職教師たちは、さすがに直接に児童・生徒たちの指導の改善に熱意を持ち、しかもイデオロギー的な偏見を持つ者はごく一部にしか過ぎなかった。永い年月にわたり反日的歴史教育を受けてきただけに、戦前・戦中の実際を知る機会も乏しく、反日的教科書の内容について問題意識が起き難い面はあるが、私の具体的問題点の提示と、①客観的事実として疑問がある事は疑問があるとして教えて下さい、②教科書に書いてある歴史の見方だけを注入するのでなく、他の見方もある事を教えて児童・生徒たちに各種の見方から考えるよう指導して下さい、と要望したのに全面的に同意してくれたし、参考文献や資料も受け取って今後の協力も約してくれた。適正な教科書が作成され、採択されるまでには同志的諸団体の努力にもかかわらず未だ相当の時日がかかるだろう。それまでも実際に教育指導を行なうのは現場の教師であり、その状況は日教組はなやかなりし頃とは全く異なる。我々が孫や子の通う学校の現場の教師たちに前掲のような教育指導を望み、必要な資料の提供や当時の実相の話し等々で協力すれば、実際の教育現場を個々に改善してゆくことができる。こうして現場の子・中学校の歴史教育がすこしずつ改善されて行けば、少なくとも我々の子孫達は少しづつ改善された歴史教育を受けるとともに、国民全体の歴史観の改善を経て、日本人の誇りと品性の改善、ひいては明るい将来の日本の再建への歩みとなり、特攻の英霊達の願いにも応え得るのではなかろうか。日本と家族たちの安全と繁栄を願いつつ散華された英霊にこたえ得る道はここに在るのではなかろうか。